麻生路郎・主宰

柳雅の話

新春號

Pensoj flugas trans la land-limon

美顔水

りとびきに

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ ゼヒお勸したい藥です！

ニキビ・	吹出物に	是非此藥

東京・大阪

桃谷順天館

不朽洞近詠

麻生路郎

米、太平洋艦隊全滅

神風が嘘でなかつた眞珠灣

ハワイ米空軍狼狽

同士討のうらみいふまもなかりけり

布哇では鳥が飛んでも眼をみはり

アロハ塔小手をかざすは同胞か

米艦ウエーキ降伏

持駒の一つに多多良加えられ

敵前上陸鰐の地區蛇の地區

見殺しにされるマニラと氣がつかず

英、東洋艦隊潰滅

死んだ子の年を數へる英議會

體あたりといふ戰術を御存じか

香港は手足のもげた蟹に似る

戰果擴大ゲートルを卷き替へる

水兵に太平洋はうちの海

一億の信頼を擔ふ 我等の東條首相

★時事★

★對米英宣戰の大詔發布さる（八日午前十一時四十五分）

★暴戾極まる米英撃滅の巨砲は世界戰史上空前の神威を發揮し、敵は短日にして脆くも潰滅した。即ち米戰艦九隻撃沈破碎、巡艦八隻飛行機五百潰滅。英戰艦二隻撃沈し、米英東洋艦隊を全滅せしめたほか、グアム・九龍・ウエーキ島・香港占領。マレー・比島・ボルネオ等に敵前上陸。ビルマ・シンガポール・ミッドウエー・ジョンストン・ベーカ等大猛襲。

★國鐵では年末年始の混雜防止の爲め二十日以降食堂・二等寢臺廢止の他、列車持込品も制限。

★お正月の食卓へ鮭・鱒・海苔・蕎麥の配給措置決る（三日）

★糯米配給決る、一人當り七合宛つ。（二日）

★七都市へ年末年始、鮭・鱒・蜜柑・林檎等の小包取扱ひ停止。尙年賀郵便の特別取扱ひも廢止。（五日）

★お蔬菜の綜合切符制を農林省で立案。（六日）

★初の「戰爭保險」要綱決る。（十五日）

★國民徴用令改正案實施、申告者以外にも必要な場合は徴用。（十六日）

★新煙草「鵬翼」「みのり」發賣さる。（十八日）

川柳雜誌 新春號目次

表紙…（戰勝祈願）……福井哲

銃後斷片……麻生路郎…（四）

隨想・丹波の猿公其他……小山文三…（四）

武玉川四篇研究（二六）……梅本鹽山 森鯉子 東魚省二…（二）

香具師に初めて かゝつた話……柳秀・青美・夜王・自有浪・水車…（二）

川柳軍艦小史……戸田孤逢…（二）

川柳にうまを拾ふ……鈴木石鼎…（二）

ユーモアを探る 海老之助……田村孝之介…（四）

お隣組のための脚本

川柳劇 拜まれた女（一場）……小畑自有浪…（二）

馬雜筆（其の一）文三・夕鶴・生々庵・山雨樓
（其の二）水客・美奈子・萬的・一笑・湖花・灯竿・小松嶺・豆秋・九坡・文庫・紫香…（二）
（其の三）春巢・鮎美・波夢道
（其の四）曉明・石鹿・孤逢・五健・自有浪・柳路…（八）
（其の五）錄雨・水虹・永車…（四）

沒句供養の夕（卽走川柳大會）……不死鳥…（二六）

兵隊さんの手紙……不死鳥…（二四）

時事……（一）

★

不朽洞近詠……麻生路郎…（一）

近作柳樽……麻生路郎選…（二六）

川柳塔……麻生路郎選…（六）

同舟近詠……諸家…（二五）

一路一沿線……麻生霞乃選…（二八）

集旗……橋本綠雨選…（二八）

各地柳壇……（三〇）

川協・柳界展望……（二八）後記……（二九）

社關係の人々……（二八）

川柳書架（七九）……（二七）

武玉川四編研究（二六）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

（605）

きれいな上をつむ曲水

省二＝曲水の流の奇麗なのを汲む（乙由は閑居と題し『曲水にひとりいそかし竿釣瓶』とよむ）。

東魚＝庭前の曲り曲つて流れる水に、散り浮いた松葉でもつまみとるのであらうと思ふ。

塵山＝曲水の宴を咏んだもので、水に浮べる觴を掬み上るのである。

（606）

樽買の心憂に二度廻り

省二＝樽があく頃だと、心覺えがしてあるので、又廻つて尋ねてみる拐と錢とを携へ、「たるはございござい」と呼んだ。空筥空櫃も買つた

東魚＝こゝは確かに空樽があると見當をつけてゐるので、初め返事のなかつたのを又二度來てみる。輕味のある句。

塵山＝もう空樽が出る時分であると、推測して廻るのであらう。

（607）

石切の腹のたつ時眼へ這入

省二＝石切が腹立ちまぎれに叩いた時、石の粉が眼にはいる。これに類する出來事は私共の日常にも有る腹を立てゝ得な事はない。

東魚＝と云ふやうな事もあらうと思はれるのを、かく詠んだので、機智的な働きに興がある。

塵山＝大工ならば、手斧で足に傷つけるであらう。

（608）

彫ほしもかたまつて行女中連

省二＝女は、とかく、いつしよにかたまつて連だち歩くもの、殊に少しでも氣味の悪い場合などには。影法師をねらつたところが、一寸した見付けどころ。

東魚＝肩をつけ合つて行く女達の姿、寫生的にうがち味もあつて面白い。

塵山＝異議無し。

（609）

あい染川へはしる居風呂

省二＝神田の藍染川。寧ろ大きな溷だといふ。「はしる」とは居風呂をぬいた湯が、川へ流れ落ちるのである。紺屋の汚水が流れ、ゴミが捨てられたといふ。

東魚＝藍染川は根津から不忍池へ流れ込むのだと思ふ。

塵山＝此の句は根津でなく、神田の藍染川である。根津の方は居風呂の水が、走り込むやうな處はなかつた。

（610）

年忘翌を言ぬ人はかり

省二＝年忘れの集で鯨飲馬食する者は、翌日の事など、かれこれ云はぬ人許りで、暮の借金取なども忘れて居るだらう。でなくては年忘れにならぬ。

東魚＝翌はどうでもと云ふ、享樂主義な連中である。

塵山＝嚢中無一物でも、一切不關焉である。

（611）

涙人のうごきはしめハ松囃子

東魚＝松囃子は、要するに謠初の意である。貧しい浪人生活の哀はれさがある。「浪人にまだ息のある松囃子」（武・初）

塵山＝喰はずと高楊枝で謠をうたふ。その哀れなる態が目に見ゆるやうである。

省二＝「住の江の波の皷や松はやし」などの古句もある謠初の事。武家では三日から唱謠皷舞。昔忘れられぬ浪人氣質。

（612）

口の吸たいあつ盛の首

東魚＝謠うたけて美しい薄化粧さへした敦盛の死首。氣味が悪いどころか、接吻もしたい位だと。

塵山＝鐵漿黑々と細眉に、年は二八の公達の御首、一掬の涙無き能はずである。

省二＝先年須磨寺に參詣して、數々の寶物を拜觀した。狩野牧心齋筆の敦盛の畫像もあつた。美しく描かれてゐた。「口の吸たい」といふ表現は「武玉川」にはかなりある。

（613）

腹替り胤替りよりあわれ也

省二＝腹替りは同父異母。胤替りは同母異父の事。この句の如き傾向は、兎角生じ易すく、世間の問題ともなる。繼母となる女性は思慮を要する。

東魚＝繼母である方が哀れが深い繼子いぢめは女性が多いのも事實であらう。

塵山＝同情に堪へぬ。

（614）

江戸見坂から見へる貧乏

省二＝芝區に屬す。小さい坂であるが急。眺望はきく。御城から淺草本所方面が悉く見えたと古書にある「見へる貧乏」は貧しい家の哀れな方が眼についたのである。――「江戸見坂千社一目に午祭」（古句）。

東魚＝莊麗なものも見えるのであるが、ごみ〳〵した貧乏町の見下ろされるのは、一層哀れな趣である。

塵山＝坂の上より直ぐ下の、陋巷を下瞰するので、江戸市の全景を見るのではない。

（615）

具足も太刀も喰へハ喰るゝ

東魚＝賣喰ひのみぢめさを、斯くあきらめたやうな、自嘲したやうな心持ちで、詠んだものである。

塵山＝浪人者の境涯で、必要に迫れば娘をも賣つて喰ふ。

省二＝せつぱ詰つた果ての諦觀。

（616）

秋の蚊のそろ〳〵歩行おかしさよ

東魚＝元氣に飛ぶ勢もない、秋の蚊のさまである。（拙吟に、薄青き春の蚊あるく襖かな。對照して興を覺える）。

塵山＝蚊の方では、少しも可笑くない。

省二＝冬の蠅でも可笑しくはあるが、蚊に苦しめられた事を思へば、此句でよろし。

（617）

小野小町の曠な洗濯

省二＝謠曲「草紙洗小町」。類詠多し。「まかなくに古今稀なる洗濯し」（樽三九）。「曠」の字妙。井戸の遺跡を塀穴からのぞいてきた。

東魚＝十四字の句の面白さを味ふことが出來る。「曠な」はうまいと思ふ。

塵山＝川で洗濯する姿とは大に違ふ。

（618）

有馬の日數誓文て行

省二＝昔の温泉番附にも有馬は西の横綱。（東は草津）。効能顯著。殊に湯女は有名。入湯の日數を限り約束してゆく。七日間を一巡りと云つたが、廿一日位は逗留すべきものゝやうに古書に教へてある。有馬湯女はアノ種の行爲はしなかつたと記されてはある。

東魚＝一週間とか二週間とかで、きつと本復して歸つて來られますよまあ行つて養生して御覽んなさいと云ふ場合であらう。

塵山＝湯女に魅せられて、日數を加へる事もあらう。

（619）

四月から降る五月雨の欲

東魚＝五月から降つたらよささうなものを、四月の中から、もう吾が領分顔に降りくさる、この欲張りな五月雨めがと云つた氣分であらう。

塵山＝此の「欲」は、外に適當の文字が無い敗。佳句とは言ひ難い。

省二＝然し此句は「欲」の字丈けで生かされて居る。

（620）

箕輪の町へ出はる榛木

省二＝箕輪とハンノ木の關係がわからぬ。少し古書を繙いてはみたが私は常に榛木はみて居る。たゞ榛木があると丈けか、前句からの關係か。

東魚＝榛の木屋敷とか云ふのがあつたかに思ふが、今手元に調べる何ものもない。

塵山＝榛の木は多く田の畔に植えられるが、昔の箕輪（現今の三輪）邊の裏は田圃であつたから、此の木も多く有つたらう。

（621）

日蓮宗の聲は下卑たり

省二＝南無妙と浪花節聲でやるところは、上品だとは感ぜられない。

東魚＝日蓮宗から小言が出やう。

塵山＝特に彼の宗の信徒の擧動は氣違ひじみて居る。

戰線の將士へ
白衣の勇士へ
慰問品を

慰問品賣場　一階

實用百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

銃後斷片

麻生路郎

支那事變の銃後が大東亞戰の銃後にまで進展した。しかも擴大された銃後からは不愉快な重壓を少しも感じない。米英何んぞといふ腰の据はつた銃後だからである。と云つて油斷はしないが海洋で濃霧が霽れたやうに行途がハッキリしたからであらう。

女と夕刊

郊外電車で、夕刊をむさぼるやうに讀んでゐるのは男に限る。女といふものはメツタに夕刊を買はない。うちへ歸へれば來てゐるといふ意識が相當强く働くらしい。タツタ二錢のことだが。

○

ところが十二月八日の午後某百貨店の前で——

そうした女たちまでが、第一夕刊を爭つて買つてゐた。うちへ歸へるまで待てないのだ。

「おつりの要る人には賣れまへん。そんなにしたら破ぶれまんが」と夕刊賣が夕刊を兩手で押えて悲鳴をあげてゐた。

生れてはじめて觀た光景である。

學生と布哇

東京のある學生が布哇が日本のものになつたら、東京府ホノル、市となるのか、千葉縣ホノル、市となるのか、どつちらだらうと云つてゐましたが、いかにも學生らしい考え方で面白いではありませんかと日君が談してゐた。

放送される軍歌

近ごろは、よく軍歌が放送される。それが殆んど明治ものである。歌謠曲の人たちの新作らしい軍歌が放送されても、一種の悲鳴のやうにしか響かないのは私たちが、明治人間だからであらうか。ビリ〳〵咽喉をふるはしたり、蚊のなくやうな女性の軍歌から士氣が鼓舞されるとは思へぬが、明治の軍歌を壓倒するやうな作が一つや二つ出來てもいゝのではあるまいか。

多少の興奮さへ喚起し得ない下手な軍歌を放送する位なら軍艦マーチの一本槍で澤山だと思うが如何。

古川柳でも名句は時代を超越してゐる。

標語の表現

電車廣告の中に、國民に訴へる標語が掲げられてゐる。表現といふことに終始してゐる私は、それ等の標語についても常に注意してゐる。

「屠れ！米英我等の敵だ進め一億火の玉だ」

といふ標語が目につく。

「屠れ！米英我等の敵だ」は、よく判るがそれだけに、あとの

「進め一億火の玉だ」はなんだか變だ。象徵的に云つたつもりかも知れぬが、ハツキリ

馬雜筆（其の一）

馬

小山文三

今から凡六十年の昔、山陰のさる田舍の若旦那に、少し離れた同じ田舍の庄屋の娘が花嫁候補に上つたのであつた。

界隈に小町娘の噂は高かつたが大事の箱入娘とて、垣間見るさへままならなかつたのだので、見たさ遇ひたさに若旦那の胸は沸き返つた。

一入器量好みの若旦那は、何とかして、之れ見まほしと頭をひねつた末とうとう飼ひつけの痩せ馬を曳き出してこれに跨り二里を隔つる庄屋の門を往きつ戻りつ駈け廻つたと言ふのである。

聞き慣れぬ蹄の音の珍しさに、彼女も母御と共に門前に駈け出したのを、馬上ニッコと打眺めた若旦那、アトはもう用なしと、一鞭あてゝ我家に駈け戻つたのであつた。

そして此緣談は芽出度く整つて、二人共に七十有餘の齡を重ねて、時々、此痩せ馬で、ウッカリ顔を見られてしまつた話なぞ追想しつゝ樂しき生涯を送つたと言ふのである。昔の田舍の戀つた見合ひ風景である。

○

外蒙の嚴冬は山川草木、荒涼として馬の食ふ可き草さへ無いが、漸く解氷期近づくと、蒙古馬は野に出て朋へ出でんと寸る草の根を堀りながら喰ふのである。

馬の喰つた跡の草の根を羊や牛が更に土深く喰ひ盡すが、豚は更に此跡を堀り食ふので、蒙古の草の根は三段階に痛められて、夏の草根は愈々深くなつて行く。

そして馬が一番御馳走を食ふ譯だと、馬政局の某老將軍が仰言つた事がある。

○

滿洲や蒙古など寒い地方の馬は毛が長い。「馬疲れて毛長し」と言ふ諺の如く、日本馬でも滿洲や外蒙の寒氣に晒されると段々毛が長くなつて來る。これは自然が毛を長くさせて天與の防寒着たらしめるのであらう。

長い毛の馬が零下三十度の嚴冬を駈け出すと背膚の汗が忽ち凍つて毛先に眞白に霜をつけるし、轡に垂れ

銃後も
戰線も
阪田謄寫版
大阪市此花區上福島北一
株式會社 阪田商會

しないところがある。

「進め一億火の玉の如」とすれば意味も通じるし調子もいゝが、大衆に對して「ごと」は一寸どうかと云ふ意見が出るとすれば、いつそ「進め一億矢玉の如く」としたらどんなものだらう。

「屠れ！米英我等の敵だ」が平凡な表現だから矢玉の如くを陳臭いと云つて、けなす譯にも行くまい。

と頻りに、添削に腐心してゐるうちに、急行電車が乘換場所の北濱を突破して天神橋に向つてゐた。

古い手紙

私は人から貰つた手紙を捨てきれないで、大切にしまひこんでゐる。

大正三年に亡くなつた姉の手紙なども小さなトランクに一杯詰め込んだまま保存してゐる。

明治三十九年に五葉君が、はじめて川柳會へ出て來て、その翌日に呉れた繪葉書なども殘つてゐる。

いろんな古い手紙が、納屋に一パイある。

少し落ちついたら、古い手紙を出して、昔を偲ぶよすがとしたいと思つてゐるが、そんな日がなか〳〵來そうにない。

「こんど宿替をする時には、アレは持つて行けまへんで」と老妻から脅かされてゐる。

「ウム、ウム」

と云つてゐるが、そうアツサリ捨て切れそうにもない。

ユーモアを探る ⑧

海老之介

田村孝之介

ユーモアにならないかも知れないが、私へ來る書簡一切の宛名が種々雜多、凡そ受取る私でも些か參るやうなのがある。大體宛名は後に書くのか先に書くのかは知らないが一寸の注意で行屆く筈だが仲々實際はさうも行かないらしい。相當頼み込んだ重大用件にも拘らず、宛名を粗略に扱はれた感じは、返事に叮寧はおろか返信を出す氣にもなれないものである。自分の名はそんなに判り難いものとは考へられない。實に妙なものである。先づ例を採つて見ると田村幸之介、幸之助、孝之助。又一寸參らされるのは孝之助誠に考へさゝれざるを得ない。之れが間違つて老之助になつて來ると、めつきり年齢が行つたやうで些か幻滅を感じさゝれる。何んとか考へて見ても田舍廻りの役者にもならず、此の名前では餘り嬉しくもない。せめて海老之助なら兎も角……。

併し結局は昨今自分の方が段々痳痺症になつて、餘り氣にならなくなつたやうであるが、筆無精な自分は考へて見ると、どうも筆マメな人の方が誤植が多いやうな氣がする樣である。但し事務的な場合を指しての意味は勿論である

兎も角宛名はほんとうのがほしいと、つく〳〵感じさせられる。

る馬の涎が凍つて二本の長い氷柱となり、走れば走る程此氷柱が太くなつて行くのは壞觀である。若し夫れ結氷の上に蹄をすべらせて馬が倒れた時なぞ、やる瀬ない同情が湧くものである。

○

文三は馬に乘れないが、それでも富士登山をやつた時、三原山に登つた時なぞ強力に手綱を採らせて鞍にしやがみついてゐた經驗はある。

子供の頃いたづらが昂じて嚴格な祖母の逆鱗に觸れとうとう馬乘りになつて灸を据へられた事もあるが、今は鬢に白髮を見る齡になつて、往々孫達の馬になつてやる事もあるのである。

馬の抵當

姫田夕鐘

馬を抵當に入れて料理屋から借金をした馬力曳があつた。期日が過ぎたので矢の催促を受け詮方なく糧たるべき馬を持參に及んだ。女將は面食ひこんなもの持つて來て貰うてもどうにもならぬと眼れた。こんなものとはなんだ金が拂へんけん抵當の馬を曳いて來たのが何の不足ちやと怒鳴つた。女ばかりでほんまにどうにもならんけん金の出來るまで待ちますわ、と言ふて熱燗を一本つけよつた。

馬

中島生々庵

私の幼年時代、私の故郷（佐賀）地方で「牛は嬶は持たぬ馬の嬶を借りてるよ」と云ふ意味の卑俗な歌を牛が町を通る毎に歌つた記憶がある。それが未だに解けぬ謎である。實際には牡馬が牝馬より目につく場合が多い樣に思ふし却つて乳房の大きな牝牛の方が澤山見受ける樣に思ふ。獨逸語を敎はつて見ると馬が中性の名詞である事を知つて不審が又增えた氣持ちがする。牛には牡牛牝牛犢と男性女性中性がはつきり區別されて居る事も知つた。日本に生れた人間の子が言葉らしいものを發する最初のものは男性も女性も「うまうま」である。そしてウマウマならぬォマンマのために一生を追ひ立てられて長い人生の旅路へ急いで行く。

丙午の祖母

福田山雨樓

小生の祖母はひのえうまであつた六十一年目に一回しかないと云ふ、緣談にも最も嫌忌される年廻りである。祖母は十數年前に八十四歳で亡くなつたが、自分にとつては養母なきあとの少青年期を守り育てゝくれた恩人であり、その慈愛と勞苦に對しては、忘れることの出來ない恩愛を覺ゆるものである。祖母は六十歳の頃から耳が遠くなり、腰が二重に曲り常住臥座に甚だ難儀をしたのであるが、神佛に對する信仰は極めて深かつた。自分は川柳の道に精進する自分の姿を振返る毎に祖母の敬虔な信仰の事を思ひ出して、祈り且つはげみたいと念願するものである。

川柳塔

＝路郎選＝

ソリンゲンの切れ味も佳し旅の宿　張家口　岩崎柳路

名人會で不味いサインをして貰ひ

ローマ字を讀めば敵性煙草なり

氣比丸遭難

遺書もなく哀れ日本海の波　布哇　高澤一浪

說教の外に非難のない社長

俺の眞似せよと六十から遊び

洋裝で故郷の驛の眼をあつめ

兩夫にはまみえぬ代り燕なり

裏があるばかりで女史に人氣あり

御願ひにOKOKが頼なし

課長には惜しい仲仕に向く軀

極樂へなどは行かない肚をきめ

公平な分配少し淋しがり　大阪　戸田孤筵

こまかい人だつたと善人の傳記

ルンペンがしやがんで左文字習ふ

町會長ひとり帽子をかむつて居

藝術の峠が見えて遺書をかき

ABCD活字のある丈さあ續け　大阪　中島生々庵

七五三なんて親父も老けてゆき

義妹女兒を生む

又一輪銃後の薫り添えて咲き

五歳の次男ピアノ演奏會初出演

親馬鹿でいゝのよ末の子見て呉れよ

嫁にやる氣は氣でゐても皆丙種　兵庫縣　戸倉普天

免税點それで呑ンでも氣が浮かず

メキシコ米國經由七十日振りに日本手紙來る（十月九日）

秋の燈にむさぼり讀んだ夏便り　ホノルル　前山北海

日米臨時配船發表（十月十一日）

歡聲が口ついて出るいゝニューウス

八月號の川柳雜誌入手（十月十三日）

川雜へ皆懐しい顔を寄せ

遙拜の開扉へ進む緊張さ

久良山人へ

媾曳を招くかりラの枯尾花

娘結婚雜　大阪府高石町　米本貴志子

一抹の哀れ結納灯に映えて

うちかけの蔭のハートよ靜かなれ

手の物を取られた樣に廣く住み

味つて母の小言を思へかし

弱き者汝は嫁の親といふ

初便り良人の後にちさく書き

味噌こしを提げる覺悟もいじらしく　兵庫縣　水谷鮎美

飲み乾して膝まるくゐる君と僕

灰皿へ獨り向いてるさびしさよ

日、米英開戰

開戰の報に風引すつ飛べり　大阪　大坂形水

子が晝寢吾が家陽が入る一間あり　大阪　西川青美

スエヒロにて

ビフテキの味覺を追うて鯨かむ　大阪　橋本綠雨

連峯の雲に干物やめにされ

風邪引いてマントに變へて出好きなり

よう氣のつく子だとほめられやせてゐる

思ひ切りもなくうろ〳〵と內地に居

松聲君の令閨を悼む

お悔みの前へ子供を並べられ　横濱　福田山雨樓

長男榮三郎徵兵檢査

賴母しく息子第一乙種の日

負けた碁に僕の短氣があからさま

小官從七位に叙せらる

聖代に官吏としての身に餘り

頰冠りで煙突掃除僕の髭

八田嘉明氏を鐵道大臣として迎ふ

父歸るそのよろこびのわが大臣（おとど）　阪谷芳郎子爵を惜む

鄕黨の巨星墜ちたり菊散れり　堺　麻生葭乃

銃後銃後ハワイ耕地ははてもなし

同胞を偲ぶも今は地圖の上

十七字我等の國語なるぞかし

着替さへ今は要らぬと思ふ世ぞ

★

松並木病人らしい人に逢ひ　伊丹　酒井美知夫

水呑んで生きる金魚を美やむ日

黑燒屋命をひらふ樣に云ひ

味噌汁が二三度出來る休閑地　尼崎　飯尾寄與史

オツチョコチョイそれで五人の父と云ふ

拾ひやの樣に電工引揚げる

使ひしてそれがゴマスリともみられ

休閑地働く人の家並ぶ

加久榮氏二女トミ子死去

花一輪ふと秋風に奪はれる　大阪　小川恒明

仲人も知りませなんだ持病なり

藝術に生きて胃散が離されず

始めから泳ぐつもりの子等の釣

丁度よい魚釣でした客の膳

交渉の役へこの舌買うてくれ　大阪　浪玲之介

オシツコが時々出ます初舞臺

外交が下手で金庫の前の椅子

日本の梅雨松岡の下野なりき

馬の目に此の前こけた船津橋　大阪　津路紅多呂

日、米英に對し宣戰布告す

日本の聲愈れ〳〵と海を越え

乞食には見えぬ乞食に云ひ寄られ　大阪　河野夜王

新任の机の廣さ忙がしさ

つぶす話は知らず鷄餌を拾ひ

どの椅子もボーナス要らぬ顏でなし　大阪　德永雅美

日、米英開戰

一億の日本刀が鞘走り

耳そうじ宗右衛門町の裏寒し
大股と小股うれしく角曲り
保險の勸誘我が糧とは言はず
休閑地諸つるばかりつるばかり
當るから買ふ債券にはあらねども

西宮 谷口綠葉

山はすでにくれない筏がながれゆく
子を毆り掌をじいと見詰める
川面に二機寫し冬が流れ行く

徳島縣穴吹町 姫田夕鐘

神經痛を病む(二句)

一歩出ればステッキの要る身とはなり
病んでからけはしき言葉ふと使ひ

奉天 吉田水車

松王のやうに白菜抱えたり
編隊機の數をかぞへる有難さ

凡兒氏内地にて女兒安産

今頃はよく寝たころと靴を脱ぎ
愚兄長子を擧ぐ
その寝顔千人針の主となれ
金冠も破れ靴の裏も破れ

大阪 妹尾八九滿

鼻の差で我が子が負けた運動會
勉強々々父の似顔をかいてゐる
隣組これではいかぬ事多し
上役といつしよの風呂のつまらなさ
十二月墨する事が多くなり

大阪 須崎豆秋

開戰(三句)

モヤ〳〵がいちどに晴れたみことのり
五五三、三の力がわかつたか
銃後、銃後魚雷を抱いた氣で行こう

マレー海戰(二句)

すてつぺんから飛車と角行とをとられたり
チャーチルも兜を脱いだ體あたり

米軍の同士討

擊ちとつて見れば味方のトンボなり

ハイラル 宮岡白峯

軍用車眞直ぐ前へ停りけり
初年兵明日を案じた軍事便
軍事便不孝な女だと思ひ
彈の音明日の我身を笑ひ合ひ

部下入院

手術室俺の名を呼ぶ兵もゐて
未亡人が來て饅頭も賣り切れる

松本 石曾根民郎

窓の灯へ政變いつかまとめられ
月凄く情婦の顔を載せし汽車
提灯の雨へ家出の顔が來る
流れ來て女は眉を描く夜霧

大阪 正本水客

悟りきれぬ姿で古着ぶら下り
集金の眼に滿足りた家と見え
雪深い生れ不孝をしつゞける
不倖せ産婆の試驗とると云ふ
船乘といふ前身を見直され
除幕式雪粉々と降續け
だん〳〵に鯨の海をせまくする
破談聞く襖へ春の陽が當り
左記事項女房共も讀みならひ
佳人として知られ作家として知られ

豐中 黒川紫香

戸を開ける音さへ違ふ長女次女
袂くそとり〳〵冬の街をそれ
自動車で來たは昔のホテルなり
凧の糸戻つた父に見上られ

後添ひの過去を近所でうたがはれ　大阪　丸尾潮花

鉛筆の芯からこんな嘘も出る
燃へそうな羽織で來てる見合の娘
つぎ當てた女の過去をのぞくまい
父ちやんは戰地母ちやん工場へ出　神戸　岡田某人

勅題

乏しきを憂れへず峯の雲拜む
賣る鐵もなく小役人世帶さび
外交論辨當箱を忘れかけ
旅の眼へ此所の名菓も店を閉め
銀行の寒さ公金持つて待ち
ぽんぽんに留守番をさす十二月
隱居所へもの訊きに來る十二月
笑はせてさて勸誘を斷る氣

十二月八日

宣戰布告神棚に燈を献ず
國に神在し戰果を申し上げ
保險金長女はたちの頃想ふ　尼崎　酒井斗風
すべりだす汽車にふるさと戀ゆる日よ
インテリのアイスを哀れとも思ふ
また趣味を變へた男をさみしく見
いけすかないのも一列の中に居る
窓口で威張られ煙草吸ひつける　大阪　北川春巢
眼帶へ天氣よすぎて腹が立ち
陸病へお見舞に行くメイキヤツプ
出產を屆けにおやぢトンビで出
殖民地生れてにをはちと違ひ
嫁ぐ日の近く和服でばかり出る
スフの見本のやうにストツキングはく

悼　寫し姿はもの云ふ如く弔詞聞き　大阪　布施筑川

お守をおろそかにする氣の强さ　大阪　尾崎方正
スカートの幅の廣さが賢母型　大阪　押谷たけを

悼

空襲のなき淨土へと君は往く
奧樣の水でも消える燒夷彈
モンペイにお見それ申した隣組
燒夷彈えゝしの家にも落ちてやれ　大阪　西尾栞

陳情の帽子鞄の置き處
ひとの事ほつときなさいと子に嚴し　大阪　菊澤小松園

耳朶も冬の風だと感じたり
泣けばとて心の晴れる齡ならず
灰皿へ春が來て居るしなやかさ
南無地藏觸るれば石の冷たさよ　大阪　魚住滿潮

眞珠灣、私も度膽拔かれたり
銀翼ははや熱帶の風をうけ
ABC、Dも交つたちよと才さ
正月の餅は有ろうが無かろうが
南海の歷史レパルス、ウエールズ
パンの列人間こゝまで來てしまひ
長生はなるほど損と父悟り
歩く子と這ふ子へ何もかも騰り　大阪　清水白柳子

正直な組合だとは言はれたが
理事監事鉋を持てば名人さ
理事會に職人氣質出し過ぎて
沿線へ引越しなしたで判らない　大阪　中内翠芳

買溜はするな準備はして置けと
走り來て並んだ時に品は切れ　下關　多田市多樓

御題

峯の雲流れて馬糧かき展げ
君んとこの女房と違ひ痢高し
世の中は廣いよく似たヒスも居り　呉　森宗男
呉市とは銃後の姿見せるとこ
陣刀あゝ御先祖はあれを持ち　大森風來子

輸送船にて

兵等みな故郷へ向いて船出する
水筒の水で猫にも似て洗ひ
時計なぞいつそこわれてゐるもよし

佛印進駐

援蔣物資の倉庫を頤で數へて見

經理室勤務

パチパチパチはい兵隊のそろばん　岡山　逸見灯竿
挨拶もせず戰爭の話が出
木枯をついて戰捷祈願に出
百錬の腕敵艦へ近づきぬ
さらば行け國の護りへどこまでも
開戰のニュースへしがみついたまゝ　大阪　夷一笑
惡運もちと手傳うてかいしよなし
緣談へ文句をたれる柄でなし
祝ひ花勅題だけを聽いていに
祝ひ花若い藝妓の豫算案

勅題

白雲悠々ヒュッテの窓をかすめたり　大津　鈴木石鹿

十一月末日所見

戀人と逢ふ稅金が高くなり

東大谷へ納骨

特別と云ふへお骨を賴みます
妻病みて鮭の切身の列に立ち
お葬ひ統制會社の社員來る　大牟田　高田抱逸
早過ぎて無駄な公衆電話料
均一に似た日給で雇はれる
防空壕蟹はとうから掘つてゐた
處女會の行事御製を詠むときめ　大阪　篠山籌彦

文樂の印象

琴彈くは阿古屋か綱か紋十郎

映畫の何處へゝより

大學出田舍訛りにきつい眉
因習と粗暴にインテリ居れもせず　下關　國弘半休
遮斷機へ待たしてすまぬ人が待ち
好物が來月は來る切符制
一列へ顏負けをして買はなんだ　姫路　岩崎水虹
停年を戰鬪帽で出なほす氣
山峽の驛で無事故の灯がともり
休閑地姑さんと氣を合せ
無位無動身は無醫村で生き延びる
忙中閑堂島川で針を垂れ
月の出も待たず舊家は早寢なり　山口縣　岩崎勇記
爭ひに負けこほろぎの身にしみる
天候の事しか言へぬ男です

路郎先生と同乘

温容は煙草の煙のその如く

長門峽にて

秋深し淵の眞砂は數へられ　西宮　阿萬々的
木炭車のけむり縣道眞ッ白し
夜霧丁度無聲映畫を見る樣だ
干されてるいわしの目にも雲動く

馬雑筆（其の二）

馬

正本水客

銃後から送られた茶殻が前線の軍馬に屆いた。大陸の野を覆ふた雪に映えて喜々としてゐる馬のうちに一頭丈け如何した間違ひか茶殻の行渡らないのが居た。彼氏長い顔を太陽へ振向けて云つた。

「こりや無茶や」

親仔の馬

橋本美奈子

寸分違はぬ親仔の馬をどちらが親かと聞かれたら皆様はどうお答へなさるでせう。私は二頭の間へ胡蘿蔔を置きます。先に食べるのが仔です。實は昔日曜學校でおそわつたの。

ウマの話

阿萬々的

三番が急に出て來よつて決勝點の百米程前から、わしの八番と並びよつたんや、そのまゝで飛び込んだんやがなあ、三番の奴決勝點でベロッと舌を出しよつてなあ……。

食堂車ウマの話をしてるなり

木馬

夷一笑

お正月早々第一回の誕生を迎へる子供に木馬を買ひあたへたところ、豫想以上に喜こんで最早乳くさい赤ン坊ではなくなりました。

木馬は昔から代用品なり。

それにもまして今年は午の年であるとは實は知らなかつたのです。

馬を洗ふ乙女

丸尾潮花

月の光に君と來て小道を歩む、靜なる流の畔に馬を洗ふ乙女が居た。秋の月は時々雲間からもれてほ乙女の白い頬をそして手を照して居た。白い月の夜、ただ一人馬を洗つて居る乙女に何處となく心引れて立止つた私はふと聲をかけた。乙女は馬は明日の朝征くのですと笑つたきりせつせと馬を洗つて居る。人通りの絶えた小川に野菊の花が美しい形を水に寫して動かない。秋の夜の月の眞下

痩馬と落馬

逸見灯竿

今の合同新聞の前身山陽新聞に柳壇があつた。私が川柳を初めて投稿したのが此の柳壇で、題が「馬」といふのであつた。それに五句やつと作句して投句した。其の發表の待遠しかつた事は言ふまでもない。一日千秋の思ひであつた。結局

痩馬に女房を叱る三河武士

といふのが拔けた。やれ嬉しやと思つた翌々日

落馬して我にかへれば絹蒲團

と言ふのが秀逸として拔けた。其の時は新聞をさゝげて其處ら邊りを躍り廻つたものだ。句の良否は別として、十六歳の私が川柳に對する最初の感激であつた。

馬は兵器だ

菊澤小松園

時局の閃光を浴びて馬の長い面も輝いて見える。近隣の乘馬倶樂部の塀に大きく馬は兵器だと書かれてある成程太平洋の波高く世は擧げて血腥い風は戰ぐ、されと馬の耳に風、平和な顔で相變らず軟かい草を喰べてゐるハ、アン馬は平氣だ。

靴の辻さん

須崎豆秋

「人參をくれる辻さん」で馬社會に有名な靴の辻さんは、三十年來店頭を通る馬に人參を與へてゐる。このため馬は辻さんの店をちやんと心得て居り「今日は／＼」と長い顔で店内を覗き込み、胡蘿蔔の御馳走にならぬ限り馬子がなんぼ鞭を入れても店頭を動かぬと云ふことです。

愛馬進軍歌

鈴木九坡

舞臺には今しも將軍が馬上ゆたかに颯爽と現はれたが、何のはづみか馬の後脚がその場にベタリと坐つて了つた。將軍いさゝか慌てゝ飛び降りると、氣を利かせた雛子がとたんに愛馬進軍歌を始めたのには見てゐる方が餘程驚ろかされた。勿論田舍芝居での話。

馬糞

長野文庫

馬と云ふ奴は所嫌はず遠慮會釋もなく道路上へ糞をする。商店街なんかで自分の店頭に近い所へ糞臭頭を置き捨てにせられた時は詮方なく始末するが、それが丁度街路の眞中でその掃除義務？が果してどちらに有るか分らない樣な場合はどちらの商店主も見て見ぬ振りをして居て中々始末をしない。こんなのはあんまり謙讓の美德とも云へまい。處が近頃增產々々で素人園藝が旺んになつて同時に肥料入手難と來て居るので肥料としての馬糞の價値がぐつと上つて來て今迄毛嫌ひされて居た街路上の邪魔ものは誰か知らん間に待ちうけて居つて、未だ湯氣の立つとる内に處理されてしまうので市中は斷然清潔で氣持がよい

この間も尻からげの老人が「こりや有難い／＼」と云ひながら町を掃除して行つたが、寔に見て居る方も有難い御時勢だ、年頭からふが氣持のよい話故失禮します。

馬券

黒川紫香

たつた一回丈け馬券を買うた私、それも切角一等だつた馬が最後に輒げてしまつてあたら大枚一圓を棒にふつた話があります……。某草競馬での話。

非特異性全免疫元
オムニン
ドッメコ
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
適應症（抜萃）
淋菌、各種肺炎、肋膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、產褥熱、其他各科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包装）
三瓦瓶入 一八〇錢
三瓦瓶入 三八〇〇錢
一八〇〇錢入 一八〇〇錢
一文試驗壹
發賣元 株式會社黒田藥品商會 大阪・東京

川柳 軍艦小史

戸田孤篷

（寫眞は山本聯合艦隊司令官長官）

太平洋の波遂にさわぐ、こらへにこらへた癇癪玉が遂に爆發したのだ。壁頭海軍の大戰果。軍艦行進曲の旋律に心を躍らせながら軍艦の歴史にふれ、いさゝか海のいさをゝ稱へよう

太古

紀元前六、七世紀フェニキヤ人は地中海東部に國をなし、世界最古の航海民族であつた。

お山の大將まだ艦隊の要がなし

エヂプトがギリシヤが海上勢力を競ひ出すとフェニキヤもじつとして居れなくなつた。二〇對の櫓をもつ櫓船が最初の軍艦としてフェニキヤに現れる。建艦競爭は速力の競爭となり、二〇對は三〇對五〇對となり舷を高くして二段三段五段遂に一六段一六〇挺の櫓を持つガレーがあらはれ長さ三〇〇呎最高一〇節の速力を誇つたとか

ありつたけの智慧を絞つて櫓をふやし

船舶史の第一階梯は櫓走船、次は帆櫓兩用船。但し帆の要途は

戰に利あらぬ時は帆を利かし

フェニキヤの末裔カルタゴとの緒戰に負けたローマが

へつちやらに船も漕ぎ手も矢も揃へ

と六〇日で艦隊を新設したり舳にラムと云ふ衝角を、艦首に敵艦をなぐりつけるクールバス（烏）といはれる鐵棒をつけたりしてローマ史華かなりし頃を過したが、その全艦隊が艦隊としての機能を失ふた時やがて帝國崩壞の決定的な樣相を示す

艦隊が亡びローマの亡びる日

中古

ノールウエー語で「ヴイク」とは峽灣のことである。ヴアイキングと云ふ種族が北海を中心として四方に進侵した。九世紀から一一世紀の頃のことである。

ヨツトにも型を發すヴアイキング

ヴアイキングお艦とゝもに葬られ

海の敵海でふせげと英國史

さらに一二世紀にかけが北佛に出來た侵略者の國ノルマンジーからヴアイキングの王ウイリヤムがイングランドに上陸作戰を試み成功してゐる。

送るだけ送れば艦を燒きすてる

異人種に犯されたキリストの聖地を恢復する十字軍時代に間もなく入つて遠征軍の一部は水路をとり、火藥と毒ガスまで知つてゐるサラセン艦隊と遭遇戰を演じてゐる。飛道具は矢だけではなくなつた。

香具師に初めて話たつゝかて

夜店の松

長崎柳秀

二十二歳の頃、或る夜知人のお伴をして大阪西區堀江に於ける「あみだ池」の夜店へ參りましたが、其時盆栽向きの松が殊の外知人の氣にいり、値段を訊いたが十何圓とか云ひました。知人は私の注意も有り、かたゝ〳〵買はぬ氣でたつた三圓につけましたが、不思議にも即座にOKの返事、知人はまるで堀り出しものを當てたやうに、いたく悅こんで持ち歸り、早速鉢植にする積りで松の根元の土塊を包める藁を解きましたがなんと「インチキ」も甚だしいでは有りませんか、全く無根のしろもの二人ともあいた口がふさがら子互に顏を見合すばかりでした。

香具師

西川青美

文化發祥の地エヂプトはボートサイド、港町の惡ずれは世界一。

寄港上陸、散歩の途中一人の土人が傍へ來て繪ハガキを取出し人目を憚つて見せる。船中有閑美食一ヶ月その寫眞に魅せられたが君子は默つて歩いた。土人はついて來る。五シルから四シル、遂に二シルまでまけた。僕は默つて二シル渡した。

「警察がやかましいから」と土人はその繪ハガキを僕のポケットへねじ込んでくれた。

「よいものを見せてやるぞ」

船室へ友人をつれて來て件の繪ハガキを出した。……なんとそれは似てもつかぬ石版刷の名所ハガキだつた。

春の一日

河野夜王

旦那一回どうですとさそうのを聞捨てながら、懷手のまゝ詰將棋を見てる怠屈男。からかつてやろかと思ひながら、尙は默つて作戰を練つてゐる。旦那無料で結構一回やつて見なさいと益々うるさい。財布は懷でちやんと握つてゐながら「金が無いのだ今日はやめとこ」と一寸誘ひを吳れると結構です萬一の時は頂きに參りますと來た。はゝんと思つてあたりを見ると目付の惡いのが一人二人。三十錢だ、遊び相手にしてやれと、やつと手を出す。案の如くたちまち負けて「さあ負けた金取りに來てくれ」と言へば「旦那おからかいでしよう、三十錢です。賴みます」と言ふのに目もくれず、約束ださあ來いと、ずんずん戻りかければ群集の中から目付の惡いのがやつぱり一人後からついて來る。途中、二十錢でも良いですから賴みますと、何回

専用の軍事用船舶が設計され出す。

戰ひに邪魔な飾りも窓も閉め

次の世紀に入ると帆の操作が研究され、全帆走船にかはらんとし、大砲が塔載されはじめる。

おしまひはやつぱり切り込むことときめ

旗竿のつもりがいつか帆に變り

帆綱切る丈けの大砲積んでゐる

近古

ヴアイキングの血が交はるイギリスに海賊への投資が流行り出し、英國史上最も絢爛たるエリザベス朝を現出する。

時々は海賊もする旗を立て

進水式艦に御神酒もちと飲ませ

軍艦建造税べびら切つてとりに來る

百門の位置をプランへかきつける

戰艦即ち大砲艦、午蒡の樣な大砲をかつての櫓の樣に高い舷則に何段もならべてゐた。一七世紀には砲數より速力を尊ぶフリゲートなる巡洋艦の先祖があらはれる。一八世紀末はナポレオンが世界の空氣を弄んだ時代。そして英海將ネルソンの旗艦ヴイクトリヤは今尚紀念艦としてポーツマス軍港に保存されドイツの空襲を不思議そうに見てゐる。

ヴイクトリヤさけて急降下爆擊機舞下りる

更に十九世紀末に至り完全に帆走と木船にアディユ。しかしそうなるまでには

鐵艦をつくるにジヨンブル躊躇する

蒸氣機關先ず曳船につけてみる

外輪船今にも彈を喰らひそう

註（外輪船―淀川や利根川を船の兩側に水車をつけて走つてゐる船）

お毒味の役をフランス引受ける

舵取りのとこまで裝甲どぶきかね

鐵の衝角まだぶつかつて行くつもり

日露戰役頃まで軍艦の舳はラツセル除雪車の樣な恰好をしてゐた。大砲の偉力が鋼鐵艦に加へられた最初の海戰は日清戰役の黃海々戰であり、尚それを裏書し有史以來の燦かしき記錄を收めたのが日本海々戰であつた。

速射砲なしではポコペンポコペンな

皇國の興廢主砲で決せられ

現代

衝角がとれるとゝもに檣も逞しくなつた。近代科學は「三笠」に四門より積めなかつた十二吋砲を一〇門上甲板にずらりとならべる英艦ドレツドノートを作り出す。

檣が三脚になり塔になり

ドレツドノート獨逸と一對一にする

この建艦の革命はそれ以前の艦を無力化し、前大戰には弩級並びに巨砲萬能の超弩級のみによつて戰はれた。戰後のワシントン會議、軍縮、英米日五・五・三の比率は平賀造船監の心血を絞らせ山椒の樣な「夕張」を完成する。

血の製圖出來て夕張り出來上り

血の製圖によつて作り上げられた艦艦には血の訓練によつ鍛へ上げられた火の玉が乘組んでゐる。日本海々戰から三十六年目、五五三のワシントン會議から二十年目昭和十六年十二月八日帝國海軍が堂々碇を拔く時が來た。緒戰一瞬にして決死爆擊を敢行した海の荒鷲によつて米英戰艦五隻轟沈撃沈。

百發百中教官よしとまだ云はず

戰術にない戰術で沈ませる

海軍省貸下げ軍艦マーチ唱ひたし

虎之巻

小畑自有浪

この一巻さへあれば、天井に足の裏を吸ひつかせて、さかさに成つてのしり〳〵と歩けると云ふ、其虎之巻を、夜店の大先生から二十錢で賜り「天井に鐵板を張り、エリキの靴を用ふべし」と、傳授されました。

代用品宣傳の先驅者

吉田水車

化學の進歩した昨今では相當立派なものが出來ては居るだらふが以前の品物と來たら全くロクなものはなかつた、と言へば香具師各位にどやも言ふのを聞かぬ振りして意屈まきれの話相手にしながら、わざと廻り道して○○から○○迄三キロ餘り引張り廻し、作句の材料にした心臟男夜壬も、飯より好きだつた作句も貧乏閑なし、近頃さはつて御覽の如し

可々。

Sata Special Klinik

呼吸器病科

診療 毎日午前

醫學博士 佐多愛彥 電話33

醫學博士 加藤謙一

醫學博士 螺良四郎 電話 1151

内科

市電堂島中町停留所北辻西入

佐多醫院

大阪堂島北町 電話八二八四

馬雑筆（其の三）

馬なみ

北川春巣

馬なみの「なみ」は、「人なみ」「十人なみ」の「なみ」である。鞭を振上げておどし、又は之で打たなければ體を動かさぬのが、卽ち人間にして馬なみである。

「女房や子供が云ふ事をきかぬ時、私は馬なみかと問うてやる事にしてゐます。あんたの家庭へも始めから此の言葉を輸入しておくと便利ですよ」。私が結婚した時に或る人がこんな事を敎へてくれた。私は家で此の話をして馬なみの理念を妻に、與へておいた。が彼女を馬なみに扱つた事はまだない。

其の人の話では、「馬なみか？」と云ふと、「うゝん！」と子供がかぶりを振るさうであるが、其の場の樣子を想像するだけで、私はおかしさが、こみ上げて來るのを抑へ得ない。

午年の年頭に當り、私はこんな事を思ひ出したのである。

自作の馬

水谷鮎美

十五ヶ年間の作句精進に舊作の馬を調べてみますと、四六〇八句の内左の十句です。十匹ですけれど午歳に因んで誌上にくろーずあつぷするのはうれしい事です。

青草へ馬をつないだうらら
かさ
判取が馬の背中に重くゆれ

隨想

(二)丹波の猿公、猪公、其他

小山文三

隊を組んで猪狩りをするを丹波では猪山と云。猪は到底一人や二人の獵人では撃てないし、假に二三發を受けても所謂急所を撃たない限りは倒れるものではない。茲に猪の卷狩、卽ち猪山が催されるのである。

猪山が始まると、大勢の勢子と獵犬が動員されて、目指す谷から遠卷きに猪を追ひ出すのである。

數多の獵師は谷を圍む峯の要所々々の待ち場に就いて、猪の逃げ場を狙ふのである。

猪を見出した勢子は、其逃げて行く方向を大聲に吐鳴つて谷間にこだまする山彦の聲は勇ましくも、待場々々の獵師に傳はるのである。

待場に鐵砲を構へた獵師は御敵御座ンなれと耳をすます折柄、笹摺りの音と共に、照準線に飛び込んで來た猪を認めると、ホー、と一聲、大きな氣合を掛けるのである。勢子と犬に追ひ廻されて、一生懸命逃げて行く猪も、此不意の掛聲に驚いて、ツト立止る所をドスンと一發喰はすのである。

此掛聲と、猪の立止りと、鐵砲の引き金の指の動きの三つの氣合が揃はないと彈が外れて終ふのだと、名人を以て任ずる筆者の伯父がよく自慢したものである。

夫れは兎に角として、猪公は此一發位では中々倒れないで、第二、第三、第四の待場に手傷の數を負ふて、やつとの事で、獵人に凱歌があがるのである。

○

山に猪を卷狩するを猪山と云ふに對して、隊を組んで川に鯉を捕るのを鯉川と云ふ。面白い對照である。

近郷近在の川獵に長けた人達數人が聯合して、先づ川幅一杯の太い藁縄を用意する。此太い藁縄の凡一尺毎に細い縄を吊して、注連縄の樣な垂レを作る、此縄の垂レの先に石塊を結びつける、此出來上つた縄をハイ縄と云ふのである。

獵師は二隊に分れて、一隊は川上より、他の一隊は川下より、此ハイ縄を各川幅一杯に川底を浚ひつゝ、曳き下り曳き上りて鯉の住む川底を脅かすのである。

嚴冬ともなれば鯉も水深き川底に冬眠の態で、其活動は頗る鈍いが、此ハイ縄の脅威を受けては逃げ下つたり、逃げ上つたりして、段々自由安住の地帶を縮められるのである。ハイ縄曳きは、夜ともなればそこに大きな網を張つて包圍地帶外に鯉の逃げ出さない樣にして置くのである。

次の日も次の日もハイ縄曳きと網張りを續けて最後に、思ふ地帶に鯉の群れを寄せ集めて、完全な包圍をやつて置いて、三叉の箭で突いたり、生捕つたりして、數日の勞苦に相當する大鯉の大漁があるのである。

鯉の生キ血が肺炎の妙藥として珍重されたり、鯉汁が姙婦に缺く可からざる榮養となつたり、其キモが胃病の藥になつたりする事は言ふ迄もない。

○

閑話休題。さて猪公の作物を荒らすのは猛烈なものがある。所謂猪首の短い太い強い頸に滿身の力を込めて、其鼻先で畑を掘り、稻をしごき、就中藷畑等は深く廣く掘り返されて慘憺たるものがある。深山に入つても猪公の暴れた跡はまるでダイナマイトを掛けた樣な大穴を造るのである。

そして毎夜、毎夜同じ場所を襲ふ習性を有つてゐるのである。これあるが爲めに、猪公も亦獵師に狙はれる運命に陷るのである。

事務家必携
日卓上記
岡本ノート株式會社

騎馬旅行馬迷惑な日が續き
還乘りの休むと蝶がもつれあひ
馬の屍体のすて値ぶみする
歌舞伎十八番「大森彦七」劇左衛門の馬鼻息の荒い事
末の子の見てゐる川で馬洗ふ
馬洗ふ馬の目玉を信じきり
馬と人月と歩いて歸るなり
築港に軍馬の玉目動きたり

馬

橋本 波夢造

都會人たる俺は馬に乘る機會に惠まれなかつた。何でも十六七歳の頃富士登山をやつて御殿場口で乘つたのが始めだつたと思つてゐる。僅か數時間丈だつたのに下りると兩足が釘拔の樣に曲つた樣な氣がして翌日厠に上るに困つたのだつた。がそれと共に僅か三尺高い丈の處なのに鈴をつけた若駒に跨り姉さんかぶりの女馬子に曳かれてシャナリ、シャナリと乘り出した時はさながら王者の氣取りで反り返へり振返へつて幾多徒歩登山者を見下した快さも覺えてゐる。

その次はぐんと飛んでつひ二、三年前堺大濱水族館の庭で子供に勸められて小さな驢馬に乘つた。こちらの兩足が地にも附きそうな小さな馬で十八貫の身體が氣の毒になつて一廻りせぬうちに止めた。俺が馬に乘つたのは恥かしながら以上の二回限りである。

併しこれでも陸軍の少尉さん（但し主計）である。

川柳に うまを拾ふ

鈴木 石鹿

午

丙午

十二支の午もたゞの午なら心配はないが、丙午となると夫を喰ひ殺すと云ふとんでもない迷信を有つ日本人である

大社たゞの午にはひとりあて　古句

丙午半座を分けて五六人　同

給料は昂らず姉はひのえうま　しかぢ

丙午いつそもらつてやらうかな　蘿風

丙午しつかり重荷つけて來る　古句

初午

一年で最も大切な午の日は二月上午の日の稲荷祭、即初午である。犬の糞と相並んで多かつたお稲荷さんの祭だ。この日は子供達の寺小屋の入學式の行はれた日であつた。が、この初午も次第にすたれ行く。

拍子とりぐ如月の太鼓賣　古句

だゞつ子に柄樽をつける初の午　同

江戸見坂千社一目に午祭　古句

初午かなんだか知らず勤めてる　辛雞

午の刻

現在の正午である。因みに巳は午前十時である。

嫁の髪巳午の間にやつと出來　古句

サイレンの正午があとやさきに鳴り　豆秋

動物の馬

奇蹄類に屬する動物の馬が柳人の眼に何と映つてゐるか

馬の性情

坊つちやんと知つてか馬は落さない　路郎

ストツプかゴーかは馬が知つてゐる　豆秋

馬方が酔つても馬が連れて來る　都良公

御主人の機嫌に合はす馬の足　たけを

萬物の靈長よりも賢いのが馬らしい。又勤勞そのもの、馬でもある。

汗かいて軍馬不平のない姿　美知夫

曳く馬も汗馬子も汗アスファルト　双虎

馬の表情

川柳人の緻密な觀察力を藉りることにする。

馬の姿も出ると戻ると　古句

何思ひ出したか馬がフト笑ひ　心府

馬の息白し年貫をうんと積み　方眠

名のる内馬はしばらくいきをつき　古句

停止線馬の動悸がよく目立ち　ライト

何遍も外で嘶く繩暖簾　紅太郎

草を喰ふ馬の口にもあるリズム　五花村

たてがみに赤涙立てゝ朝の咆哮　劍花坊

眠る馬繋がれた儘立つた儘　同

草を焚く籠へ長い馬の顔　古句

馬の尾の流線形に戯れる　夢葉

馬の顔鼻はなけれど鼻が顔　劍花坊

馬の目と出合ひ新兵ぎよつとする　あけ烏

馬の首のびて道中せまくなり　一柳

馬の糞、小便、屁

柳人はこれをも見のがさないで、詩化してゐる。詩情亦豊也矣。

馬の糞傍から霧が解け始め　藤市

休閑地馬糞一役買はされる　双虎

八文が呑む内馬はたれてゐる　古句

馬の小便二三ぱんわきを行き　同

賣れぬ奴馬の屁ばかり嗅いでゐる　同

最後の馬の屁を嗅がされてゐるのは宿場女郎の賣れぬ奴で、馬に迄馬鹿にされてゐる面が眼にうつる。『出女の鏡にうつる馬のつら』と云ふ古句もある。

（つゞく）

お食事とんかつ
ちよ
店
湖同
ちよ地法善寺境内

近作柳樽

選郎路

車中談取止
してもよし秋の伊勢路の肱枕　松江　田中將雄

蔣政權
消炭のしかも今消えかゝるとこ　同

日米會談
睨めつけた、寄つた、刀に手をかけた　同
芒原待機の戰車脊を見せ　同
監視哨夜霧に困る眼鏡なり　同
たくましい性慾もよし臨戰下　同
秋風の寺の欄間の地獄圖繪　同
感激の旗二の腕が露はなり　同
猿ぐつわの女のやうにマスク居る　姫路　小川靜觀堂
千鳴啼くどうせ喰へない千鳥啼く　同
新品の防毒面を斯う掛けて　同
征くときは斯うもあれかし日本晴　同
霧晴れて地物地物の兵の顔　同

秋季演習雜吟（三句）
鳴るラッパ高い姿勢で飯にする　同
無雜作に兵トラックでゆれてゐる　同
吸ひさしを捨ててすつくと部隊長　同
結ひたての髪を氣にしたチントンシャン　神戸　平川久枝
屋形への道はしるこ屋コーヒー屋　同
休閑地利用コスモスだけとなり　同
金ぶちの眼鏡つめたく嫁きをくれ　同
隣組今日は產婆に早がわり　同
遠慮なく易者懷中電燈向け　同
官報をくつて主任の退けを待ち　同
眼帶をした女學生取り卷かれ　松江　本庄快哉
歸還兵たれ憚らぬ聲をする　同
さん附けて喧嘩してゐる女學生　同
天聲人語アメリカ人にわかるまい　同
戰死した軍馬東を向けてやり　同
細い子を連れて課長の日曜日　同
休閑地里の母にも見て貰ひ　同
ちらし鮨女房を連れて行く處　松江　溝呂木彌兵衛
晝の月がひつかゝつて居る枯芒　同
寢るまでを其の儘着てる作業服　同
この土間で失禮と云ふ作業服　同

女流作家叢書
池田小菊著
來年の春
定價一・八〇
〒一四

★

佐藤一雄著
詩集
日本列島
定價一・五〇
〒一四

最新刊
松波次郎
濱田雲梅
（錢十八圓一價定）
豪清野岡
心・物・金
（圓二價定）
治英川吉
傳婦名本日
（錢十八圓一價定）

近刊

全國書房
大阪・末吉橋
振替大阪六四八二四番

滿足な新聞がなし子澤山　同、
椎の實が一つ沈んで手洗水　同
屋臺ずし割込んでくる懐手　松江峠　谿二
指先に又も崩れる玉子ずし　同
風呂敷の一萬圓は安つぼし　同
芒原誰が忘れたのか詩集　同
決心はつかず芒にうづくまり　同
驛前の夜霧遺骨がしず〳〵と　同
でこぼこのたたみの上の晩酌よ　廣島　大山露斗
よろこんで死にますと云ふ戀も有り　同
妻曰く大根も安う有りません　同
まな板はつけものを切る音がする　同
たたみかづ七枚と云ふ家に住み　同
帳場でもにせの夫婦と思へども　和歌山　秋月宏方
出戻りて同窓會へ顔見せず　同
保險屋に入つて來るなとも云へず　同
高價買入れ看板はまだ元のまゝ　同
內職を稼ぐと見えぬ髭を持ち　同
ヒットラー又又地圖屋まごつかせ　香川縣　早馬清富
修道院戀押殺す　姿なり　同
嫁取つて女優の寫眞葬られ　同
妻の愚痴、木綿が反で買へた頃　同
ゴムベルト寸暇も切れず鑛石が往く　滿洲　菊川泰平樂
說明が手眞似に變る碎岩機　同
銀泥の泡ぶく〳〵と機をくぐり　同
卷揚機世紀の音を立てて往く　同

叡山坂本廻遊

枝付きの柿京極でもてあまし　大阪　玉井彩泡
器械編みほつれ始めてみじめなり　同
史實など問題でなし安芝居　同
獨身の机射的の人形など　同
勉強屋マカラン屋みな公定價　大阪　有馬千斗
更生部實は修繕する所　同
模型賣る名も賴母しき荒鷲屋　同
顏で買ふ物へ女中は留守をさせ　同
新聞の見出し大きい十二月　大阪　松浦帆船
十二月私も服もつかれたり　同
釣つてゐる背中を電車走りすぎ　同
數字では長者と三桁違ふだけ　同
あなどらず恐れず一等運轉士　大阪　久保子紋
一輪の大きくゆれたホツチキス　同
勉強をする子しない子さしたい子　同
妻若しリズムに乘つて臺所　同

滿洲街頭風景

日、滿、露、色とり〴〵の夜店の灯　愛媛縣　岡田香桐
日めくりの殘り少なく病み續け　同

旅順二〇三高地へ登る

此の岩も先祖の血汐しみてゐる　同
三年振りやつぱり故鄕の米の味　同

馬の墓

秋草もカンカラカンと馬の墓　滿洲　渡邊曉童
露しとどして此處かしこ馬の墓　同
步哨線片手拜みに國想ふ　同
引上げへとなりの幕舍別れに來　同
子の欲しい夫婦鐵瓶磨きだし　岡山　岡田笛六
金を借る手紙が書けず寢てしまひ　同
泣き相な姿をんなが眼鏡買ふ　同
踏切で急しき性の人と知り　同
夜の旅情A列判の冊子繰る　松本　川上遼二
いじらしきをんなの足袋のこゝのもん　同
叱られてギターがめいじの唄をひく　同
髯たてたひとのくしやみの大いさよ　同

健全漫畫雜誌
大阪パック
月刊
價　二〇錢
送　一錢
全國ノ書店賣店ニアリ
發行所
輝文館
大阪市東區橫堀二
振替大阪二六四番

水莖の跡と顔とは似もやらで　兵庫縣　谷口寒草
甥若し酒は一升のむといふ　同
魚すきの湯氣にも女美しい　同
顔見世の其税金にあきれたり　同
胸像の噂も有りて師の貧し　東京　山田宙望
移住して産みし兒すでに駄馬に乘る　同
花生けて娘は二つ三つ老け　同
久々の郷の灯に觸れ征く身なり　同
太平洋雲は自然のまゝ動き　大阪　勝草水
此の人が闇で買つたと思はれず　同
湯の街で十も撞けないキューを持ち　同
奉公日妻の意見も聞いて見る　同
勤め人今日此の頃は鍬を買ひ　石見　田中弘樓
健康であつて絣がよく似合ひ　同

賣家賣却の報入手して

次々に沸く追想へ涙なり　同
年賀狀其の悪筆も親しまれ　大阪　富岡巨人
同僚であつた上司の朝の禮　同
契約をすれば保險屋寄つかず　同
增産の鎌に蝗は追れたり　大阪　山川富士
洋車に乘つて支那語を一つ知り　同
臨終の母へ博士の子が戻り　同
五年賞握り減りしたハンマの柄　尼崎　山田南濃路
うけ賣りのニュース職場へ活を入れ　同
女工ちと足らぬ男を使ひ合ひ　同

山川兒兒へ

大橋の流れ變らぬ朝を發ち　松江　吉岡遲兒
名を秘した獻金もよし銃後なり　同
忠告に來て御馳走に振り向かず　同
科學する心と見たり不具玩具　大阪　八竹正柳

兵役改正の日

『送る歌』唱はせてやる日が來たぞ　同
紙芝居こゝ聽けといふ聲になり　同
昇給はするが餘ちぬ金なりき　松江　青空みたか
醫院など目に入らない健康よ　同
指組んで或る日タイプに想ふ事　同
メニューに代用食のでかでかと　大阪　青野花笑
銀翼の眞下は菊の花畑　同
追つて來て女給は甘い嘘をつき　同
おどろいた事におけさを子が唄ひ　名古屋　八幡勿來
父がまた一に戻つた繪双六　同
隣り組パンの時間も知らせ合ひ　同
電建の月賦へ狹く住み馴れる　靈中　高山武士
越して來た人へ親しく隣組　同

溝口健二の「元祿忠臣藏」

凝り性のNG無駄な嵩をみせ　同
知事さんへ手紙公文書が淋し　愛媛縣大洲町　米澤曉明
時機を待て待てとはお氣に召さぬらし　同
口下手は赴任當時の事なりし　同
配給が濟んで主人は庭を掃き　島根縣横田町　横川美柳
國の荷のがんぢがらみが又嬉し　同
老いの身へ戰闘帽の紙芝居　同

防空演習

黑頭巾高橋お傳らしくなり　松江　吉樹早苗
『白い手を恥じよ』の中にまだわたし　同
女子青年團長のきつい近眼鏡　同
背の子の意志にそむいた足が行く　大牟田　上村十四之
血液へ冷たく慣れた顯微鏡　同
値踏する癖も商家の育ちなり　同
夜學校故郷にそむいた悔があり　豐中　三輪丘堇
隣組遊んで居ない事を見せ　同
重役になれぬタイプを鏡に見　同
組合を創る寒さの十二月　和歌山　田島破皷

馬雑筆（其の四）

馬

米澤曉明

凡そ馬とは緣の薄い私。馬の鼻をすらさすつた事のない私。强ひて言へば、夜動のペタルが馬をつないだ綱に急停車？した程度。だから「君馬に乘つた事があるか」の問にはギヤフンと參る筈であるがなか〳〵どうして。それらA、B、C、D包圍陣聲を突破する絶對唯一の武器我にありだ。

「僕はこの田舍にはゐるが、象に乘つた事があるぞ。」と日章旗高らか……。

乘馬の鯰附馬を曳く

鈴木石鹿

朝野新聞明治十三年十一月十九日の記事—岩手縣生れの佐柄甚藏埼玉縣御用係某の馬を借り洋服を着て板橋の貸座敷に遊ぶと可なりの鯰としつた樣子で大いにモテた處朝になつて一圓五十錢七厘の勘定が一文も拂へず女郎屋でも驚いて附馬を附けて

篤農は腰をたゝいて返事せず　同
指導者が人間らしくなる夜長　同
士農工商まだ商人の氣が拔けず　朝鮮　弘津柳慶
見舞客派手な姿へ覗かれる　同
微熱です〳〵よと兵元氣　同
後家はんの定期の年を盗見る　大阪　桝岡詩朗
三ツ兒など產んで區長も來てくれる　同
控除額一二十四圓の嫁子です　同
救急車師走の町を振りむかせ　大阪　野元吐空
車中にて喰ふミカンさへ旅の味　同
ベンザイで滑る子供に星が落ち　同

長男滿二歲

ヨチ〳〵で姉を泣した男の子　島根縣　新出谷一聲
子福者の愚痴はおむつの干し所　同
日淸は祖父日露日支は子と孫と　同
スマートな建物に似ず鍬や鎌　松江　恒松可紅
リヤカーが行く國道も十二月　同
師走には未だ〳〵遠い懷手　同
女郎花私こんなに太つてよ　松江　恒松布美子
トランクも少さく花嫁渡滿する　同
情けない迄に痩せてる紺絣　同
泣かされて泣かして夕暮れ子が戻り　島根縣　新出谷百合子
親類は皆征つてます妻の里　同
結び目の堅さ慰問品と知る　同
父は陸、子は大空の御奉公　大阪　平井流舟
戰死ともしらず乙女は書きつゞけ　同
ご意見があればと組長强くでる　同
山奥へ近代科學うなり立て　滿洲　山崎勇祐
モーターへ泰然として撰鑛女　同
轉勤が支那語を入れて便りをし　下關　多田海朗
花鋏子が三人で錆ちまひ　同

連峯の雲に轟く初飛行　大阪　中西彌生
戀すてて大陸へ嫁く女事務　同
征つた人想ふニキビを見る鏡　大阪　山本柴光
禁煙をしただけながら奉公日　同
長居した氣兼もあつて子をすかし　北支　吉原浦島
アベツクの肩へ色ずく土手柳　同
我も更けたのか舊師が見忘れる　廣島縣　杉原愛鳩
北滿の便りにはもう雪が積み　同
國策を逃げ口上にのみ使ひ　長野縣　佐二木千隈
配給の來るまで禁酒したと云ひ　上山田　同
寫眞一枚に集る世辭の多いこと　神戸　湯淺小城子
歸還兵同志支那語で話し合ひ　同

興亞奉公日

霧深しあすこに宮城遙拜す　朝鮮　松田幸士

妻肋骨カリエスのため入院手術

手術終ゆ看護ベコンと頭下げ　同
花鋏いと靜かなる部屋にする　愛媛縣　佐伯鷄城
巡査默と急流に立つ杭に似る　同
あてこすりの樣に返信料を添へ　布施　小谷華素兒
地方版又褒められた子澤山　同
綱渡りフト片方の乳が張り　大阪　水谷虻蜂
カンフルの流れが生きてゐるばかり　同
値上りへレベルを下げてまだ吸ふ氣　大阪　佐野牛步

兵役法改正さる

聖戰へ丙種はつきり答へられ　同
應召を心一つに待ち續け　布施　上田翠光

戰線迎春譜

チヤンチユウの香ひ正月らしくなり　同
生ビールいつそ傳票濡れてよし　大阪　宮田不二
佛蘭西に似た口紅はよし給へ　同
フト錢の音に氣付いた三等車　松山　沖原綠風

餘興の馬

前田五健

私が青年社員だつた時、ですから相當古い話になりますが、會社の家族慰安會の餘興に社員劇をやる事になり題は「雪月花」、雪は義士、月は小督と仲國、花は兒島高德と云ふ今でも恥かしくない藝題でした。私はその仲國で琵琶の「頃しも中秋三五の夜」で馬と共に花道から出る儲け役です。ところが、いよ〳〵當日になつて、馬の脚になるY君がお子さんの急病で來られない、馬が半分に成つた騷ぎです。代役も役が役故、代り手が無い。ヤツト絕對秘密、謝禮と酒一升で話が出來、F君がナンボ顏が見ぬとて一杯元氣と云ふ譯でコツプで引つかけ、後脚に成りました。花道で、ヤタラに脚を動かすので見物が「馬の後脚ウマイゾ」の拍手です、「オイ顏を見せろ」の騷ぎの中に幕に成り、見物が樂屋へ押掛けさうなのでF君大急ぎで着替へ花道下から觀客席へ知らぬ顏でまぎれ込むべく「ハイ御免ッ」と裾をまくつたらその脚は、馬の翠色股引のまゝです「ハイ御免ッハイハイ」出さうとした處昨日から豆一つ喰はぬ甚藏の馬が腹ペコで動けず附馬が芋三百文だけ買つてやると漸く動き出した。甚藏は兩馬を隨へ警察へ自首した。

右の餘は當時の官員樣の代名詞。遊興費壹圓五拾錢は米なら一斗三升、銘酒なら七升に當る十四字詩の狂句

乘馬の餘附馬を曳く

米國の騒動

國策へまだ雑音が入るなり　同
抱いた子が傘を握つて重くなり　神戸　市川治男
隣席は善人らしくよく眠り　同
子があると思へぬ後家の洗髪　尼崎　長谷川三司
品物は買つたが子供見失しない　同
世話好きの圓滿居士が早く死に　大阪　丸島利生
極樂の心配係やつとむらん　同
夕方のラジオ病人だけがきゝ　大阪　岩本葉知朗
轉業の身を給料が意識させ　同
月のある道を一人で歩いて見　大阪　丸本輝子
モンペーのまゝでお嫁に行くと云ふ　同
默々とゐる衛生夫へ北の風　大阪　橋本美奈子
未亡人に出すお手紙へ氣をつけて　同
近道をよく知る子等の戰ごと　岡山　山上笑風
三尺の庭が淋しい獨身工　同
模型機を造つてみたが船場の兒　尼崎　江口正路
亞米利加を睨らむ樣に浮を見る　同
かへり道おぢてもよいやうに子は負れは　大阪　中野延枝
その際にこの名もよんでくれました　同

重慶政府へ

やがて水枯るゝ水車のガタゴトリ　愛媛縣　木村棟友
寒稽古オ、強くなれ小劍士　同
追風に乘つて祖國を下に見る　松江　村上光緒
嫁一人小さく坐る佛の日　同
メガホンに息の續かぬ風邪をひき　松江　岡崎祥月
パーマネントレッテルもと背も高し　同
敵機皆水漬屍となりにけり　大阪　保田呆人
食慾があれであるのかきりぎりす　大阪　金子正一朗
新聞眼が有るから借りて見る生活　諏訪　牛山臥牛
悲しみの庭へ悔みの雪眞白　北支　宇敷桃水
一滴の水と思へぬ流れやう　松江　村上四希
驛までは送つてくれる派手な傘　大阪　谷崎一昌
常會の遲參を詫びる喋りやう　淸島　菖蒲榮城

パーマとは別に活花習つとき　大牟田　池田吾平

防空訓練

大空の護りへ老母もモンペはく　大阪　永田六龍子
履歷書を書いて綺麗な心もち　京都　宮川春渉
迫擊砲よりも蚤にあわてたり　福知山　吉本某兵
御武運の程へ子の手を合せさせ　福知山　吉本尙代
樂しみは田舍に送るお小遣ひ　奥　大内紅芽子
どうなりとなれと云ふ氣も時には出　滿洲　佐野三造
綱引に總力を出す隣組　松本　西藤義春
檢温に嘘をつく程馴れて來る　愛知縣　前田秋暮
配給に口綻ばす左利き　兵庫縣　節女
人生の縮圖滿員電車出る　尼崎　山下秀峰
小使室古い時計がかけてあり　大阪　和田あきら
爆音へ戰爭ごつこやめにする　大阪　淸水澄子
許す氣の小言謝罪を待つてゐる　大阪　浪花駒志希
心臟の弱さをお婆ちやんなげき　大阪　米田春童
荒鷲の獨壇上だ今日の月　布施　水補
戰線に父あり無駄を叱られる　丸亀　馬場浪二
鶴嘴の揃ひ工夫もわるく無し　大阪　富本無煙
診斷書持參で見合ひせよと云ふ　名古屋　松井靜子
空ッ風と云ふに女の立ち話　名古屋　東正美
雪よ降れ〳〵穫り收に悔はない　長野　堀内敏郎
稻刈りへ犬も一役雀追ひ　伊丹　岩井泉
常會であの娘の母へ眼をそらし　奈良縣　吉田湊萬
參禪の耳に爆音近づきぬ　奈良縣　森田カズヱ
憧れの東京あまりに冷たすぎ　山口縣　長野井蛙
臨月で三越の灯が忘られず　西宮　奥田綠翠
枯草を抱いて蝗は往生した　大阪府　澤田萬壽於
氣にくはぬ人なり話上手なり　大阪　東方鷹丸
雨降つて半時早い店を閉め　金澤　山野一角
上役の氣嫌とらぬを自慢にし　西宮　名田榮坊

亡兄の四十九日法要

四十九日母が氣弱になつて居り　岡山　岡眞理子
正月も古兵の想ひ別な事　滿洲　大坂淸一郎

午歲偶感

戸田孤逢

賑かに文化を作り出すのが人間の五本の指であり、大地に大きい足跡をのこすのが一個の蹄とまで化した馬の脚である。プロットにプロットを積み重ねて思想を表現するのが長篇小說であり、棄てさるだけ棄てゝ殘つたのが十七音詩である。いづれも自然の妙華であり、藝術の至境である。

お化け馬

小畑自有浪

化けるのは狐や狸だけではありません、馬でも化けます、牛肉に化けます、さうして吾々の胃腸を慢々になやまします。
特に、大阪では物凄く化けます。

馬のてんがく

岩崎柳路

昔大阪の日本橋筋「大源味噌屋」の前で馬力に味噌樽を積込んでゐました。倉から出した味噌を積み終へた馬方は一寸一服と店で休んで居る間に馬は何んに驚いたものか一目散に味噌をつけたまゝ荷車を挽いて駈け出した。あれよ〳〵と通行人が騒いで居るうちに島の内から船場邊りまで駈けて行つたらしい。馬方はあとを追ひ汗だくで走りながら道行く人に、今味噌をつけた馬と出會ひませんでしたかと聞けば通行人曰く、「馬のでんがくなんてわしや知らんよ」

★お隣組のめたの脚本★

川柳劇

拜まれた女

小畑自有浪

時は現代、處は田舍、氣候は問はず

人物

屋根葺職人源作（六十五）
妻しげ（六十三）
息子太吉（三十五）
郵便集配人茂作（五十）
妻とく（四十五）
だるま茶屋の女きん（三十）

舞臺は、上手寄りに牀机でも置いて座敷の心、下手は土間、土間の正面に屋根葺用の大きな鋏をかけ、土間の外は門口、門口に「屋根源」と小さな看板。幕開く、午過ぎ、寢床が二つ、源作がうめいて居る。一つの寢床は空である。

源作　あゝいてい〳〵〳〵、（と寢返えりをして）おや、婆さんが居ねエ、どこえ行き居つたんぢやろう、（と顔をしかめながら起上り）あゝいてい〳〵、（と、腰をさする、と下手家の裏より、手桶の水を下げて、杖に縋つて、しげが、びつこを引きながら來り、足をさすつて）

しげ　あゝいてい〳〵。

源作　あゝいてい〳〵。（と、ふと門口の方を見て）おや、おしげでねエか。

しげ　あゝ、（と、痛さをこらえて何氣なく）おめいさま、起きて居ただか。

源作　おめい、リョウマチで足が痛むだと云ふだに。

しげ　なあに、これくれいのこと。

源作　無理してくれるでねエもうぢき妹の奴がやつて來るだで、こんな時に彼奴をこき使はにやどうするだ。

しげ　ほつ〳〵〳〵、なんぞと云へばおとくどんばつかしえらい目に合して、すまねエこつた。

源作　はつ〳〵〳〵、あんなガラツパチでもやつぱり兄妹だ、こんな時には間に合ふだ喃。

しげ　さうともい、あのおとくさんが居てくれなんだら、わし等こんな時には二人共、早速養老院行きぞい。

源作　……。

しげ　でも、養老院と云つても、わし等には立派に伜が一人あるんぢやけ。

源作　あゝよさねエか、あんなろくでなしのことを思うと、あゝいてい〳〵、よけいに腰が痛んで來るだ。

しげ　どれ〳〵、ちつとさすつて上げるべい。

源作　いや、おめいこそ、ちつとさすつてやるべい。

しげ　なんの〳〵、わしや、今日はそれ程でもねエだで。（と源作の腰をさする）

源作　あゝ情けねエ、屋根屋職人が屋根から轉ぶ樣ぢやわしももうあかん哩。

しげ　歳ぢやで喃。

源作　歳か喃。

しげ　六十五と云へば喃。

源作　うーむ。

しげ　伜さえしつかりしとりやあ、孫の守でもして、日和ぼつこをしとる歳ぢやで。

源作　あんちくしよう。

しげ　こげいにふた親ともわるいと云つてやつて居るだに。

源作　だで、あんな奴のところへ、よけいなことを云つてやるでねエつて、あれ程云うてきかせて居るだに。

しげ　でも、こんどは、九州でも名の知れた、藤浪組とか云う、大きな土木の工事屋で、小頭とかに成つて立派にやつとると云うもんぢやけに。

源作　はつ〳〵〳〵、其小頭にぼい使はれて居りやあ、まだましの方かも知れねエだ。

しげ　さうかも知れねエだなどうで又あの子は、三十五にも成つて、いつまでもふら〳〵として居るだか。

源作　病氣だんべい、はつ〳〵〳〵、もうえゝだよ。（と、しげ、もむ手をやめて泪をおさえる、と此時、下手より、源作の妹とくが、めしびつを抱へ、煮魚を皿に盛つたのを持つて來る）

とく　おや〳〵、兄さも姉さも起上つて、そげいなことをして大丈夫け。

源作　さう大病人扱ひにしてくれるでねエ。

とく　ほつ〳〵〳〵、でも家根葺屋が腰を痛めたら、馬が足折つた樣なもんだで喃。

源作　はつ〳〵〳〵、此の野郎、人間と馬と一緒くたにしくさつて。

とく　ほつ〳〵〳〵、さあ、夕飯と、ほら、珍らしくうちの人が魚を釣つて來ただで持つて來ただよ。

しげ　いつも〳〵、すまねエだなあ。

源作　はつ〳〵〳〵、茂作どんの針に引つかゝるなんて、運の悪い魚もあつたもんぢや喃。

とく　そりやあ、降つても照つても三百六十五日、仕事を仕舞うてから、魚になぶられに行かん日はないのぢやけ。

源作　たまにやあ義理からでも引つかゝつて來れること

もあるんぢや喃。

しげ ひどいことを。

とく ほつ〳〵〳〵。（と此時下手より、とくの亭主で、郵便集配人の茂作が、釣竿をかついで來る）

茂作 はい今日は。

とく おや、おめいさま、仕事中に釣竿なんぞかついで何んぞな。

茂作 うるせいな、釣は仕事をしもうてからの話だが、昨日の釣場は向うの橋下だつただが今日からはちよいと場所を更えるのだで、橋の下から竿の宿更へだあゝさうだこげいな馬鹿たれに相手に成つて居るどころでねエ、なあ兄さよ、よろこびなせい、喃姉さ、太吉から手紙が來ただよ。

しげ えゝきただか。

とく まあ、今頃になんちゆうて來ただ。

茂作 まて〳〵。（と手紙の封を切る）

とく どうせ役奴のこつた、汽車賃でも無心云うて來て居るのかも知れねエだ。

茂作 うるせいな、そげいそかさうでねエか、讀んで見にやあわかるかい。

とく 讀まんかとてきまつて居るだ。

茂作 おめいはだまつてろ、エーと、謹啓ときやがつたな。

しげ ふむ〳〵。

茂作 御兩親とも御病氣の由承りびつくり仕り候。

しげ ふん、承つてわら半月目にびつくりしやがつただな。

茂作 それでもおめい、びつくりせんよりはましだ。

しげ それから何んと書いて居るだ。

茂作 ついては旅費迄御送附被下候段身に泌みて有難存上候。

しげ これ茂作どん。

源作 呀ツ、いけねエ。

源作 誰が旅費なんぞ送つただ。

茂作 すまねエ。

しげ あれ程内しよにしてくんろと書いておいてもらひたいと頼んだだに。

茂作 すまねエ〳〵、それがその、ついうつかりとして喃、これはおめいのおつかあの血の出る樣な臍繰りぢやで、仇やおろそかに思うでねエぞと、意見ばつかし書いたもんぢやけ。

とく おめいさんの意見なんぞが何に成るもんけい。

茂作 でもわしの意見が身に泌みたればこそ、こうして返事を寄越したでねエか。

しげ でも、戻つて來ると云うて居るだか。

茂作 あゝさう〳〵、それが肝腎だ。

とく 途中のうざ事なんぞばつ〳〵ととばして、そこだけ早う讀むだよ。

茂作 よし〳〵、えゝと、戻るか戻らんか、（と手紙を繰りながら）おゝこれからが本筋だ。

しげ うむ、何んと云つてるだ。

茂作 愈々仕事の方もこゝ四五日の内に手が拔け申可候間。

しげ ふん、あのろくでなしが、親より仕事の方が大事だか。

茂作 これがつまり新體制の滅私奉公、即ち。

しげ 何んだな。

茂作 えーと、職域奉公ちゆう奴でねエか。

しげ いくら職域奉公だつて、親の病氣までほつたらかしとくと云う法はねエ。

茂作 ぢや、戰爭に行つとつて、「チ、キトク」の電報が來たからと云うて、突擊しとるのを中途でやめて歸られるか。

しげ 戰爭と土方仕事とが一緒になるだか。

茂作 馬鹿こくでねエ、もう此頃では第一線と銃後ちゆうものゝ區別が無うなつた以上は。

とく すまねエだが、もうちよつと其先讀んでもらえんぢやろうか。

茂作 あゝすまねエ〳〵、何しろ此奴が横手からごぢや〳〵と云うもんぢやけ、はつ〳〵〳〵。

しげ 笑ひごとでねエだ。

茂作 あゝさうだ、えーと、ついては手が拔け次第立歸り申可候間、何卒養生專一に成し下され度候。

しげ ふむ〳〵、それから。

茂作 しまひだ。

しげ それだけい。

茂作 でも、戻つて來るちゆうとるんぢやで、えゝでねエか。

しげ さうぢや、ひよいとしたらあしたにでも、戻つて來てくれるかも知れねエだな。

源作 わかつたもんかい。あげいな奴に旅費なんぞ送りくさつて。

しげ すまねエだ、でも、あんな不孝者んでも、やつぱりわしの腹を痛めた兒ぢやもんなあ。

茂作 （鼻を啜つて）子無しのおめいなんぞには、この姉さの氣持はわかるめい。

とく ふざけるでねエ。（泪をおさえて）わしぢやとて、やつぱり人の子ぢやもんな。

茂作 情けに變りはあるもんけい、か、はつ〳〵〳〵、さあ、太吉がけえるときまつたらわしも安心だ、ぢやあ、さつと一氣にかたづけて來るだ。

源作 御苦勞だ喃。

しげ 氣をつけて喃。

とく ふんとうに氣をつけてな、此の間の樣に、役場の方を學校へ配達したり、學校のを駐在所へほり込まん樣にな。

茂作 はつ〳〵〳〵、阿呆の一つおぼへが、何をほざきやあがるだ。（と家の裏手へ去つて行く）

とく どれ、わしも洗濯物でも片づけておくだか。（とそこらの汚れ物をまとめる）

しげ それぐれいのことはわしがするだで。

とく なあに。かもうことたあねエ、でも、なあ兄さ、太吉、ふんとうにけえてくるぢやろうか。

源作 何が、あげいな不孝者んの云うことがよ。（と、ごろりと顔をそむけて横に成つて頭からふとんを引つかぶる）

しげ 戻るとも、戻らいでどうするだ。（と、泣く樣につぶやいてこれも又臥床の中へもぐり込んで、ふとんを引つかぶる）

とく さうだな、旅費まで送つてもらつて居るんだでな（と、汚れ物を持つて家の裏手へ）間。

と下手より、藤浪組小頭のはつぴを着、トランクを下げた太吉が、だるま茶屋の女さんと共に登場。

太吉 此處だよ。

きん おや、屋根屋さんなんだね。

太吉 おあきれなすつたかね。

きん ふん、どうせ大家のお坊ちやんとも思つて居なかつたからね。

太吉 ふざけるない。（と、忍び足に、家の内を覗いて見て）やつぱりさうだ、可哀想に、二人枕を並べてらあ、やせ衰えたのか、べら棒に寢姿のかさがひくいや。（と鼻をこすり上げる）

きん おや〳〵、うわばみの太吉つあんでも、やつぱり生れた家の門口を踏むと、いやに氣が弱く成るんだね。

太吉 ふん、てめいの樣なだるま屋のあばづれに、こんな氣持がわかつてたまるかい。

きん ほつ〳〵〳〵、おつしやいましたね、そのあばづれを、一日二十圓の日當で雇つてさ、これがてまへの女房でございとね。

太吉 これもみんな親に孝行の眞似事がしていばつかりによ、なあ、不孝者は相見互ひさ、しつかり賴むぜ。

きん おあいにくさま、あたしやね、生れてからふた親とも知らないんだからね、それだけに、おかげでこんな肩のこる樣なことをしなくつてもすみさうだよ。

太吉 はつ〳〵〳〵、おかげさまでと來やがつたな。

きん 而し、念の爲に云つとくがね、今日一晩だけ芝居をしたら、明日の朝は、お前さんのおゝせの通り內職がてらにやつて居る料理屋の方がいそがしいからつて云うことにして、さつ〳〵と引揚げさしてもらうからね。

太吉 だが俺も念の爲に云つとくがな、萬一へまなことをやりやあがつたら、たゞぢやおかねエからな。

きん ふん、あたしや役者ぢやないんだからね。

太吉 何をッ。

きん ねエ、しみつたれたことを云はないでよ。

太吉 此の野郎。

きん もう十圓だけはり込んどきよ。

太吉 ふざけるないッ！。（ときんの横面を毆る）

きん おや、ぶつたね。

太吉 なぐつたがどうしたッ。

きん おいッ、藤浪組の小頭さん、ぢやない、借り物のはんてんだけの小頭親分さん。

太吉 野郎ッ！。（と續けさまに毆る。と、此時、家の裏手より、洗濯物を抱えて、とくが出て來り）

とく おやッ、太吉でねエか。

太吉 呀ッ！おばき。

とく 何をするだッ！。（と洗濯物を投捨て）このどあほ奴がッ。（と太吉の向う脛を蹴る）

太吉 呀ッ！。（と倒ほたる）

とく のう、可哀想に、（ときんを抱きしめ）勘辨してくんろよ、のう、あゝ（と手をほなして）ほつ〳〵〳〵、おめいさま、あのう、いや、これは始めまして、わしや、あのう、太吉の叔母でやしてのう、ほつ〳〵〳〵、さうけい、あんな太吉の樣な者にまあ、わしからも禮を云ひますだ、さあ、あげいな者んはどうでもええ、さあ〳〵、家の內へ這入るだよ、喃、可哀想に、こげいなむごいことをして。（と抱きしめる樣にして頬をさする。きん、「わーつ」と、とくの胸に顔をうづめて泣く）其の泣聲に源作としげむくりと起る。

とく さあ這入るべい。（ときんをいたはりながら、太吉の方を向いて）馬鹿たれ奴がッ、おめいの樣な者んはどうでもえゝ、さつさとどこえなりと出てうせろッ。（ときんに）喃、もう心配するこたねエ、わしがついて居るだ、

御入院——
——
は
ず
需
に
應
め

醫學博士 谷內與一郎

谷內小兒科病院

大阪市港區市岡元町一丁目（電車道）
電話西四四八一三七番

さあ、むさくるしいところうぢやが、遠慮するこたねエだよ。（と無理に家の中へ押し入れる。源作としげびつくりする）

とく これ、兄さよ、姉さよ、喜びなせい、喜びなせい。

二人 ゝゝゝゝゝ。

とく 嫁ぢやよ、嫁ぢやよ。

源作 た、誰れの嫁ぢやよ。

とく 太吉の嫁ぢやよ。

しげ えゝツーた、太吉のけい。

とく 太吉の馬鹿たれの嫁ぢやよ。

源作 た、太吉のけい。

しげ ほ、ほんまだかよ。

源作 な、なぶるでねエだぞ。

とく ほつ〳〵〳〵、馬鹿こくでねエ。

源作 さうけい。

しげ さうけい。

源作 ふつ〳〵〳〵、、喃婆さんよ。

しげ お爺さんや。

源作 あげいな者んにでも喃。

しげ やうまあ喃。

源作 えゝ嫁ぢや。

しげ えゝ嫁ぢや。

とく もつたいない位ひぞな。

源作 ふんとうだ。

しげ ふんとうだ。

源作 すまねエだ。（と頭を下げる）

しげ ふんとうにまあ、あげいな者んの嫁に喃、すまねエだ〳〵。（と兩手を合す）

きん （たまり兼ねて）お母あさん。と、しげの手を取つて泣く）

太吉 （擲られた足の痛さによろめきながら家の中へ這入つて行つて）お父つつあん。

源作 おゝ太吉。

太吉 おつ母あ。

しげ おゝ太吉よ。

太吉 すまねエ。

しげ 何を〳〵、えゝ嫁ぢや〳〵。（と泣く）

きん 勘辨しておくれ。（と、太吉の胸に縋りつい泣く）

太吉 俺こそ、俺こそ。（と泣く）

と此時、家の裏手より、茂作が引返えして來て、此の有樣に驚く、とく、「お前さん」と其胸に縋りついて泣く。

（幕）

兵隊さんの手紙

私はいろんな階級のいろんな人たちの手紙を讀むのが好きだ。普通に往復された手紙は邪心もなく書かれてゐるので、生きた人生をマザ〳〵と見せて貰へるからだ。若い頃に、アメリカで發行されたラヴレター集を讀んで感心させられ、いろんな戀文を貰ひ寃めたところが、無學で、當字や誤字の多い女郎の手紙に一等眞實味が流れてゐて、女優の手紙が薄つぺらな、齒のうくやうな文字の羅列であつたことを知つたことがある。なんと云つても、手紙には、その人のありのまゝの姿が出て來るので、下手な小說などを讀むよりもズツと興味がある。

○

近ごろはよく兵隊さんの手紙を讀む。兵隊さんの手紙には、なんとも云へぬ味のあるものが多い。その一例に、戰沒川柳人、島紅石が山本斗酒氏に送つた手紙の一節を擧げて見やう。

「小生の子供の寫眞最近家より送つて來り、その發育ぶりに驚いてゐます。支那の子供を可愛がつてやることも自分の子供へ盡す一つのみちと考へ給與される菓子など殆ど與へて居ります」。

一讀、泣けて來るではないか。神に近い彼の純眞さ、彼の親こころ、彼の人間愛、そんなものが、この短い手紙の切れつぱしにさへ、うかがへるではないか。これは斗酒氏に宛てた手紙ではあるが、日本人全體に宛てた手紙としてうなづくことが出來やう。

（不死鳥）

馬雑筆（其の五）

馬に叱られる

橋本綠雨

今から二十五六年前の夜阪急の陸橋を居眠りながら歩いてゐると荷馬車と對向して突然嘶きと同時に胸へ馬の顔がぶち當つた。

嘶きに居眠りを覺す戀の道　綠雨

『馬』

岩崎水虹

五年前のお正月、始めて寶塚へスキーに行つた時相當顔面制動を行つた後、やつと宿の二階に落ち着いた。樂しい夕食が濟んで一服してゐると、突然地震がグラ〳〵と來た。一同一瞬顔色が變つたが幸に直ぐ止んだ。三十分程經つと又搖り返しが來たが、之も直ぐ止んだ。然しどうもなまらづしくないので、深雪の中庭を廻つて恐る〳〵階下を覗くと之れはしたり暗闇の中で馬の尻尾らしいものが搖れてゐる。さては馬小屋の二階に居たのか、馬が武者震ひする

低に私共が貧乏震ひしてゐたのでした。

暗闇をすかせば馬の尾が搖れる

滿洲の馬

吉田水車

滿洲には（尠くとも私の居る奉天には）實に馬が多い。一體矮小であるが力があるので勞役に使用される手近の所では馬車、荷馬車、勿論軍馬としても重用されて居るが、脚が短い關係上走るのに小きざみであるから、乘つて居る人が樂ではなさそうに見える。尤もあはれを止めるのは馬賊横行時代に其徵發から逃れるために各自所有の馬の片眼をつぶしてしまふたことである。今でも勞役の馬を見ると殆ど片眼に星の入つたのや、つぶれて居るのが多い。私は初め榮養不良から來るものとばかり思つて居たが、故意に片眼をつぶしたと聞かされて暗然とした。王道樂土の滿洲だけはこれからそんなことのないやう彼等のために祈り度い。

同舟近詠

松山　前田五健

陶窯の見學小さく通りぬけ
陶畫工大觀の繪の骨を抜き
貧しさが生んだ美談と謙遜し
菊花壇わが好く色に瞳がもどり

兵庫縣御影町　長崎柳秀

浪花節女の咽喉と思はれず
疑へば眞人間なる人はなし
回覽板隣りの嫁は字が達者
大言壯語今の身分は二階借
金よりか氣前ですわと惚氣られ
假縫ひを女事務にも見て貰ひ
子澤山馬鹿にされても社は退けず

宮崎縣　橋本克海

性格を曲げないまゝの轉業者
長き袖子らの祭は滿ち足りて
とも知らずマネキンに似し娘の瞳
父の脊の丸み伊豫路を想ふらし

神戸　潮田明坊

青竹を割つた氣性の酒が好き
上に上ある制服の太い筋
辯護士になる氣の頃の書を曝し
空襲はするがされずに勝進み
法學書など下積にして謠
ホルモンが欲し恩給がつきました
連峰雲元日の野の展け

奈良縣　嶋田翠峯

秋や秋手をばつくねてどうする氣
ぼろ口がありそに見へる十二月

今治　長野文庫

父祖よりの傳來品も惜しからず
これからは國の御楯よ鐵火鉢
もう少し考へて見ろ臺所
要りそうもない腕にある腕時計
勝つ自信無く同類へ呼びかける
切り詰めるべきは頭髮位かな
又こゝに同業組合事務所出來
南方の話常會遲くなり

長野縣須坂町　高峰柳兒

週報に追はれ氣味なる社長室
店頭は空瓶轉業まだ迷ひ

名古屋　鈴木可香

敵前上陸へ想ふは泊めた兵

化膿症

内服・短期奏效

中耳炎
扁桃腺炎
淋疾
化膿性婦人科疾患
皮膚化膿
盲腸炎

アルバルジル錠

包裝 二十錠 五十錠 百錠

製造元 山之内藥品商會 東京・大阪

〝没句の種々相〟を語る路郎主幹

川柳雑誌社主催

没句供養の夕

―師走川柳大會―

★英米宣戰布告の前々夜十二月六日夕刻から、我社恒例の師走川柳大會が意氣深い〝没句供養の夕〟として開催された。

會場はお馴染みの御津八幡宮特異な催しだけに定刻前より長崎からの珍客、横田千之助氏等の出席、福知山からは隣組脚本でお馴染の小畑自有浪氏が顔を見せられ時の移るにつれ續々と詰めかけ、場内はぎつしりと鮓詰め兩側廊下にまで溢れ出るといふ豪勢さで、幹事一同早くも嬉しい悲鳴をあげる。當夜の出席者百餘名中御夫婦組は波夢造氏、綠雨氏、石鹿氏等の三組。

★司會者は定評のある田中風葉氏。先づ開會に先立つて全員起立、嚴肅裡に宮城遙拜、皇軍將士に感謝の默禱を捧げ終つていよ〳〵開會。先づ不朽洞會委員長戸倉曹天氏の挨拶〝川柳發展の陰には幾多の句が没になり、あたら苦心の作も葬られてゐる。併し没句必らずしも悪いのではない。たとへば傷病兵が必らず弱い兵隊でない如く、没も亦、運不運といふべきで、武運拙なく没になつたのであります〟流石は實業家らしく流暢な態度で述べ、喝采を博して降壇。續いて席題三題を發表、作句三昧に入る。當夜の主旨が主旨であるから〝是が非でも入選せずば、没句も浮ばれまいだらう〟と豊通例會以上に眞劍さが漲ぎる。

★石鹿氏が小聲で誰かに何か話してゐる。〝いやあきまへん、あんたはいつも僕を困らせるんだね〟これは自有浪氏の大きな聲。没句供養の燒香に作家代表を同氏に、せがんでゐるらしい。附近からクス〳〵と笑ひが起る。

★句作が終ると、不朽洞會員石井白面人氏が漫話〝押賣〟を話される「押賣といふ題で、詰らない話を皆樣に押賣することになつてゐます」と開口一番滿座を笑はす。續いて押賣のあの手この手を語り、「近頃は押賣といふのが流行してゐるさうですが、押賣といふ話へ來れば私の話も既に終りになるわけです」と、氏獨特の輕妙な話術で一同を魅了して降壇される。

★この時上京中の浪玲之介氏（不朽洞會員）より〝ゴセイカイヲイノル〟の祝電。いやが上にも意氣ますますあがる。

★いよ〳〵没句追善供養を營むことになり、司會者より〝作句者の代表として橋本美奈子さん、選者代表の路郎先生御燒香を願ひまアーす〟の聲に應じて兩氏うや〳〵しく正面にもうけられてある祭壇に進み、山と積まれてあるもろ〳〵の没句をつまみあげ淨火に投ず。この間、才人石鹿氏が大僧正よろしく、いと嚴肅に小畑自有浪氏作の川柳經を讀み上げる。

没句供養　川柳經

奇妙張來、茲に供養し奉るは〝川柳雑誌社主催、川柳没句追善供養の爲、生みの親達相寄り相會して懇ろに營み申すものなり。そも〳〵没句とはもろもろの天才才子の資腦より生れ來りしものにして、世にも稀なる名句と過信せられたるものなり。されど一度ひ、これを選者の篩にかけられんか、名句は忽ち迷句として篩の下にこぼさるこそ眞になげかはしきことなり――中略――唯々川柳に心するものは柳祖の本願をたのみ、句の善惡は選者にすがり没句は潔く茶毘にふす可き也あなかしこ〳〵

★しーん……此間場内の何と靜かなることよ。嵐の前の靜けさで、忽ち起る爆笑、哄笑の波に沸き立つ「うまいねえ、没句の靈魂もこれじや成佛しますなア」の聲しきり。

★兼題披講の後、本社主幹麻生路郎師の〝没句の種々相〟と題する講演にうつる。

〝私は三十有餘年間に幾百萬幾千萬の句を没にして來たことでせう。選者といふものが如何に至難な立場にあるかといふことは想像以上でありますので、今夜は、事實没になつた句の種々の適例を持參いたしましたので、それにより各位が第三者の立場から冷靜に考察、なるほどこれなら没になるのも無理からぬと御判斷を願ひ、没句の幽魂を慰めていただきたい〟と選者の苦心と、没になる句の雖點を、没句を數句提出して判りよく説明、一同の賛意を博し降壇される。

支部對抗句戰

第一回戰

（勝）鶴町支部—梅田支部（負）
大鐵局支部—天王寺支部
豐中支部—堺支部
松坂倶樂部—城南支部
四ツ橋支部—渚支部
鐵道病院支部—有恒倶樂部
阪大川柳會—尼ケ崎支部
地方代表—道頓堀支部

第二回戰

大鐵局支部—鶴町支部
松坂倶樂部—豐中支部
四ツ橋支部—鐵道病院支部
阪大川柳會—地方代表

第三回戰

松坂倶樂部—大鐵局支部
阪大川柳會—四ツ橋支部

優勝戰

阪大川柳會—松坂倶樂部

支部對抗句戰

★席題披講に續いて「支部對抗句戰」が開始される。この對抗句戰は參會者一同をアッと言はす可く、案内狀のプロには發表せず、係員が極秘裡に案をねつてゐたものだけに、俄然！場内は興味と興奮に沸きたつ抽籤による對抗表が正面に貼り出されると同時に、各支部の輿望を擔つて各一名宛の代表が選拔される。出場支部並びに選手名は—順不同—梅田（綠葉氏）鶴町（巨人氏）大鐵局（某人氏）堺（角堂氏）豐中（紅多呂氏）有恒（波夢造氏）天王寺（富士氏）松阪倶樂部（石鹿氏）四ツ橋（美奈子氏）城南（滿潮氏）尼崎（美知夫氏）道頓堀（萬よし氏）阪大川柳會（栞氏）地方代表（自有浪氏）鐵道病院川柳會（春巢氏）渚（潮花氏）以上十六組。作句時間は僅かに二分間！若し、時間内に作句し得なかつた場合は敗退となる。

各對抗組毎に同じ題が手渡される。審判行事は路郎師一人。

何しろ勝負は水物。それに題、時間其他に拘束されてゐるから、强はものと言へど眞の實力發揮は難かしい古豪勝つか？新進勝つか？。全く勝負の豫想はつかない。

滿場早くも騷然。〝がんばれッ〟〝支部の名譽にかけて〟の聲援が飛ぶ。タイム係の試合開始の合圖が發せられた！忽ち場内かたづを呑んで一瞬水を打つたやうな靜寂にかへる。そのなかに〝どうしても勝たねば〟と選手の眉宇に眞劍な氣魄が浮ぶ。たつた二分間が五分、十分のやうに長く思はれる。タイム係三司氏はストップウォッチを睨んでゐる。いよ〳〵時間だ。「三十秒前…二十秒前…十秒前…五秒前…カーン！」停止の合圖だ。泣いても笑つてもペンを置かねばならない。各代表の作句が榮香氏によつて高く讀み上げられる。網對公平を期すため、一々讀み上げられた句に勝敗の判斷を下すのであるから、審判路郎師も眞劍だ。かくして試合は第一回、第二回、第三回第四回と進められて行つたのであるが結局別表の如く阪大川柳會（栞氏）に名譽の凱歌は擧げられたのである。特に記すべきは紅一點美奈子さんの奮戰ぶりで、準決勝で惜しくも敗れたが女性川柳家のため萬丈の氣を吐かれた。

★尙天地人に入賞された人は、兼題「入門」（天）生々庵（地）翠光（人）柳太、「外交」（天）貴志子（地）滿潮（人）曹天、「末練」（天）柳太（地）文雄（人）銳々、「水兵」（天）駒志希（地）鮎美（人）銳々、席題「發奮」（天）鮎美（地）小松園（人）紅多呂、「舞臺」（天）不二（地）美知夫（人）八歩「供養」（天）九一（地）柳笑（人）紅多呂諸氏。

★かくして午後九時三十分、盛會裡に幕を閉じた。（凡生記）

慰問袋を
戰線の勇士へ
きつと喜ばる
大鐵百貨店

川・柳・書・架（79）

水と鬪ふ

島紅石著

▼本書は西孤舘の激戰に於て敵彈のため胸部を射貫かれ散華した川柳人島紅石の遺著である。

▼これが編纂は柳友、山本斗酒氏で卷頭には同氏の熱筆で「水と鬪ふ」の解說の一篇が掲げられ著者の戰功人格、作品等についてあますなく綴述されてある。

▼本書目次の概要を列擧すれば、島紅石の追憶（山本斗酒）、戰塵雜記—水とたたかふ、聖戰句陣、傷ける友に寄せて、征戰十一ヶ月の記錄、紅石戰死當時の情況—戰友神谷・岩崎兩君に聽く、柳論と隨想、紫閑洞句集、北風百句、川柳連句、悼句、跋

▼昭和十六年十二月一日發行、B列6號、二三三頁、非賣品、横濱市中區元町五丁目百八十五番地横濱川柳人倶樂部發行。

▼著者の三周忌にあたつて柳友の友情から刊行されたもので、その點著者の大きな欣びであらう。

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼從來作ってはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。（川柳講座幹事）

ジーペの協川

柳界展望

催

▼本社師走川柳大會は六日午後五時半御津八幡宮で開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座七日・廿一日午後一時▼有恒倶樂部川柳講座十一日・十八日午後四時以上何れも路郎師出席▼阪大川柳會並に警察病院川柳會は大東亞戰爭勃發により本月は中止。▼川雜堺支部十二月例會は十六日。▼川雜尼崎支部忘年句會は十九日。▼川雜廣島支部創立五周年記念句會は六日殿舟寺に於いて。▼川雜道草戰捷句會は十三日。▼川雜廣島支部では石原伯峯氏（不朽洞會員）を送る會十一月廿六日開催。▼川雜渚支部では青野花笑、桃木競舟兩氏を送る會を十一月三十日開催。▼川雜布哇支部ウィロー吟社十周年記念句會は十月十六日盛大に擧行された（通信遅延）

消息

▼新川柳暖流吟社（長崎）では主宰谷口青之助氏が第一線を退き、横田千之介氏がそのあとを襲ふこととなつた。同時に機關誌「暖流」の署名人が交遞した。▼靜岡川柳會の「靜岡川柳」ではその一三九號を富士山號として刊行、川柳人二十氏の富士山の句の選評で大半を埋めて、靈峯富士のために氣を吐いてゐる。▼麻生路郎師は「週刊朝日」に岸本水府氏と交替で、自作の時事川柳とその評釋を擔當されることになつた▼永田里十九氏（不朽洞會員）は十二月廿三日、盲腸炎のため藤森病院へ入院、直ちに手術された經過良好▼津路紅多呂氏（不朽洞會員）麻生アート氏（編輯部）は去る十一月三日奈良麟王寺の嶋田翠峯氏森田カズヱ氏を訪問された。▼福田山雨樓氏（不朽洞會員）は今度功績により從七位に敍せられた。尚は令息は第一乙種に合格された。▼戸倉曹天氏（不朽洞會委員長）は十二月上旬福井、金澤、新潟方面へ旅行された。

一路集

募集句

沿線

葭乃選

沿線の名所案内行屆き　治男
沿線は晝から雨戸閉たまま　詩朗
沿線は燈火管制下の暗さ　將雄
沿線の工場へ國防色の列　吐空
沿線で藥の名前覺えて來　九坡
沿線の丘に苦むす頌德碑　可學
沿線になつて疲弊の村が生き　雅美
沿線に醫學博士の名が並び　香桐
沿線にそふコスモスの花ざかり　朝光
沿線へ汽車は鳴子の役もする　藤樓
沿線の變る景色へ子ははしやぎ　梅春
沿線で釣れさうなとこ見付けとき　宗男
沿線の便利な所で出養生　葉光
梅林の有る沿線へ屋敷建て　春童
沿線へ沿線へ都市ふくれ行き　牛歩
沿線へ仕事見付けた二階借　浦島
沿線に住んでおかづを買うて去に　カズヱ
沿線の此處も二階は手内職　不二
沿線のみのりを祈る汽車の窓　八重
沿線に住んで蛙の名もわかり　彌生
沿線の學校歸りを危く見　美奈子
電車から覗かれさうな新世帶　秋暮
沿線の今日もここらで信號待　綠葉
沿線へセットのやうな家が出來　柳全洞
汽車の窓仁丹加茂鶴中將湯　笛六
沿線は桃のさかりかかへり客　三丸
沿線圖他社のは細く現はされ　千斗
(五)沿線に何の工場か灯が續き　鶏城
(五)沿線の者がコースをきめされ　正柳
(五)沿線をさうつと探して借家なし　三丸
(五)護岸工事須磨や明石も傷められ　臥牛
(五)沿線の地圖花を描き魚を描き　帆船
(人)沿線でパッタリ出合ふ十年目　鶴聲
(地)沿線の卍記號へ途中下車　千斗
(天)沿線のどこまで市内電車くる　十四之

旗

綠雨選

大使館燦と輝く日章旗　蘭
頂上の旗を目あてに登り行く　文子
寄せ書の旗へ懷しい筆のあと　秀峰
ハイキング皆んなが旗について行く　彌生
信號旗無事故へ色があせて來る　鶏城
突入の一歩手前の日章旗　詩朗
戰ごと敵も味方も日章旗　春童
クレオン畫皆ニッポンの旗が立ち　笛六
君が代がすめば國旗は空高し　牛歩
旗影に母は小さく禮を受け　柳全洞
朝風になびく日の丸日本晴　吐空
支那海の果から果へ軍艦旗　小樓
日の丸を殘して一家ハイキング　綠葉
翻翻と揭揚塔に陽は斜め　榮坊
背の子は旗に手を振る立話　海朗
國旗出す朝餉の前の一ときよ　宗男
子に旗を持たせ氣强く送る妻　美奈子
肅々と進む軍旗へ固くなり　可學
何かあるたんび出て來る萬國旗　浦島
良民が日の丸持つて歡迎し　八重
我が軍の旗に逃げたと歸還兵　葉知朗
日章旗一番乘りへちぎれて居　九坡
旗々々プラットホームに殘つて居　山人
默禱がすめばかすんだ旗の街　斗風
聞きなれし軍歌へ弟旗をふり　同
友軍機日の丸裂けんばかり振り　三丸
征く時と違ひ弔旗に迎へられ　同
(佳)日章旗の下一億の氣が揃ひ　不二
(佳)入城へ俄作りの旗を立て　抱逸

▼鬱谷鶴好坊氏（下關）は今度下關驛運轉掛主任に榮轉された。
▼高須啞三昧氏（大連）は十月中旬張家口へ。同地の岩崎柳路氏夫妻（不朽洞會員）山崎小鮎氏と歡談された。
▼浪玲之介氏（不朽洞會員）は十二月二日から九日まで重要產業統制問題で東上。
▼鈴木石鹿氏（不朽洞會員）は十月廿五日夜、大津市行啓町の町內會婦人部で「生活切下と貯蓄」を川柳によつて講演され喝采を博された。

慶　弔

▼圭幹麻生路郎師令孃紳子さんは十二月三日華燭の典を擧げられた。
▼植山九天氏（不朽洞會員）は十一月二十四日男子正規君を擧げられたお召し出しもう來てほしい男の子　九天

轉　居

▼大西光陽氏は大阪市西成區千本通三ノ三一北脇樣方へ
▼澤田英壽於氏は大阪府南河內郡長野町字木戸四〇四へ
▼岡田周一氏は岡山市北方二四一へ
▼藤井舟淵氏は大阪市住吉區昭和町中一丁目四〇へ

正　誤

▼十二月號三十頁第一段七行目の「わからないとこは」の句及び第二段九行目「苦力あざやかに」同十八行目「足跡を追ふ斥候」以上は何れも裘光氏の句。

社の回覽板

★德永雅美氏（石鹿氏紹介）谷口綠葉氏（鮎美氏紹介）が今度不朽洞會に入會された。何渡邊曉童氏は止むを得ない事情により一時退會された
★曩にサービス部で募集した色紙に「あなたの句を漫畫に」は申込みが殺到して、筆者いささかヘキエキの氣味なので、十二月末日限で一ト先づ打つ切ることとした。次ぎ〳〵うけ付順に揮毫の上發送してゐるが未着の方は今暫く御辛棒願ひたい。齋藤綠雨ではないが、筆は一本衆寡敵せずなので御諒察ありたい。

新春句會

★8日（木）

★一月八日（木曜日）午後六時
★會場　御津八幡宮（電區八幡町佐野屋橋筋角）
★兼題　「南洋」　麻生路郎選
「羅語」　高橋かほる選
★柳話　「布哇と川柳」麻生路郎選

主催　川柳雜誌社

★★★★★★

記後

★★★★★★

▼春は春でも春が違ふ。米英を向ふにまはして更に男前を擧げた戰捷日本の春である。我等は文化戰線の鬪士として昭和十七年を鬪ひ拔かねばならぬ。
▼十二月號でも減ページをしなかつた本誌は新春號でも特に增ページをしなかつた。要はページ數ではない時局下の編輯は與へられた紙數にどんな內容を盛るかが問題である。その點編輯局全員は全力を傾倒した
▼戸田孤逢氏は米英艦隊の潰滅に感激され「川柳軍艦小史」を執筆、海國日本を刺戟されることとなつた。
▼小畑自有浪氏の快筆は隣組の脚本「拜まれた女」にユーモアと人情味のカクテルを盛つて戰捷の春の好讀物とされた。▼鈴木石鹿氏は午の年に因んで、「川柳にうまを拾ふ」を寄せられた
▼特別原稿「馬」「香具師にはじめてかゝた話」は例によつて、時局下に朗笑を忘れないための贈物である多數執筆者各位の好意を深謝する。
▼本號から從來の「柳界展望」欄を廢し、それらの記事を「川協のページ欄」へ發表することとしてその欄を「川協のページ柳界展望」と改稱することとした。
▼本社主催の「師走川柳大會」はハワイ海戰の前々夜十二月六日「沒句供養の夕」として開催したところ、頗ぶる有意義な會として多數の出席を得たことは大きなよろこびであつた。同夜、電擊的に各支部の對抗句戰を發表したところ、支部の名譽にかけて何れも力鬪され一段と興趣が深かつた。今後機を見て支部對抗句戰を計畫したいと思つてゐる。
▼本號は印刷の都合上締切を嚴守した。從つて多くの句稿を割愛した。それ等は次號で發表することとした諒とされたい　（路郎生）

（佳）榮冠の旗は涙にぬれてゐる　治男
（佳）氣狂のやうに應援旗を振り　カズエ
（佳）校旗いま奉仕の列へ飜へす　千斗
（佳）日の丸の眞下覺悟を誓ふとこ　一聲
（佳）城頭は銃で日の丸かざし上げ　百合子
（佳）優勝の旗を圍んで撮される　うたの
（佳）子を抱いた散歩は春の旗の街　栗光
（佳）日滿の國旗に誓ふ拓士村　敏郎

ザンギリ頭でない以上
櫛を通して
スッキリと…
伊豆椿
ポマード
伊豆椿香油本舗　大槻彩芳園

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

川柳雑誌社主催
川柳人協會後援

師走川柳大會

十二月六日　於　御津八幡宮

出席者（順不同）

路郎・柳太・波夢造・豆秋・古詩郎・家路郎・虻蜂・千之介・水客・石鹿・雅美・美奈子・嘗天・紫香・鷹丸・平行・九一・柳笑・嘘川・白面人・生々庵・流舟・風葉・英二・昌信・翠光・年子・カズヱ・恒明・不二・小松園・青美・美知夫・鮎美・緑葉・治男・駒志希・蜂郎・花笑・春巣・富士・巨人・白柳子・曲人・孤蓬・九柳・八歩・自有浪・香林坊・夜王・久一・小城子・織心・琴泉・栞・湊萬・潮花・満潮・緑風・角堂・水明・三司・呆人・萬よし・鋭々・霧彦・牛歩・紅多呂・彌生・まさ・吐空・無煙・哲・某人・亞鈍・絲雨・寄與史・八櫻・正路・覺榮・葭乃アート・凡生

「入門」　緑雨選

（五）入門の始めて知つた匙かげん　市多樓
（五）月謝には觸れず入門許される　某人
（五）入門をして雑巾を縫はされる　豆秋
（五）入門の母はひとりで喋つて居　波夢造
（五）家掐てゝ來た入門を持て餘し　文雄
（人）入門の瞳外らせば青疊　柳太
（地）名を遂げるまでを苦とも覺悟で來　翠光
（天）入門にお道具立てのすさまじく　生々庵

「外交」　豆秋選

（五）新任大使第一聲は富士をほめ　夜王
（五）外交の或る日お世辭がいやになり　石鹿
（五）外交のひとさし指がよく動き　鮎美
（五）外交のうまい男の目が細し　柳太
（五）外交員或る日ハンカチ忘れ　美奈子
（人）自主外交ダンスも夜會も抜きたい　曹天
（地）問答は無益と知つた日本刀　満潮
（天）栗栖さん一億人と空を飛ぶ　貴志子

「未練」　白柳子選

（五）あきらめて居れどなぜほの米の味　英二
（五）未練ではない戰線の子の寫眞　柳太
（五）公電へ今は未練の無い遺族　不二
（五）灯を消せば未練は鬼となつてくる　鮎美
（五）末つ子に未練があつて言ひ負ける　晨修
（人）あきらめた筈の女叔しく居　鋭々
（地）未練ない筈の故國を夢に見る　文雄
（天）征く人へ未練露なき瞳が笑ひ　柳太

「水兵」　夜王選

（五）逞まし可愛さ水兵は顔を見せ　生々庵
（五）水兵が歩けば同じ顔にみえ　九一
（五）水兵日てルーズヴェルトは馬鹿かねえ　自有浪
（五）月清し水兵母に便り書く　勿來
（五）水兵の呵々大笑するたのもしさ　小城子
（人）軍艦旗の風水兵の立ち姿　鋭々
（地）水兵の日記うれしい日本髪　鮎美
（天）水兵の腕隆々と汗拭ふ　駒志希

「供養」　鮎美選

（五）供養してお寺の庭の雪を見る　白柳子
（五）供養の灯消えて亡母の影となり　緑葉
（五）供養の日愛人涙して暦る　満潮
（五）粗供養を配る子問へば五つなり　栞
（五）供養して花の散るのをなぜぬなる　八歩
（人）粗供養と見に書かしてる寂しさを　紅多呂
（地）貧しさの中に供養の氣が揃ひ　柳笑
（天）供養する灯の金色はありがたし　九一

「舞臺」　水客選

（五）曙轉へ舞臺の風があたるなり　紫香
（五）開幕を待てず舞臺をのぞいて見　正路
（五）舞臺裏子役チョコ〳〵してなり　富士
（五）交歓は舞臺袖で握手する　栞
（五）迷い子を抱いて舞臺で立ちあがる　寄與史
（人）初舞臺乳母に抱かれる役がつき　八歩
（地）童話劇舞臺の裏がさわがしい　美知夫
（天）泣かせる子役へだけの雪が降り　不二

「發奮」　鋭々選

（五）發奮をして圖書館へ二週間　白面人
（五）薄情へ今に見ともと故郷を出る　石鹿
（五）發奮の日の佛心をおき去りぬ　鮎美
（五）發奮は祭太鼓の灯をはづれ　潮花
（五）發奮をして頭から水を浴び　豆秋
（人）發奮を女如きにさとられまい　紅多呂
（地）出世して來ま手紙の墨が滲れ　小松園
（天）發奮の窓に栃檀の實も赤し　鮎美

川雑

梅田支部句會（大阪）

鮎美報

爆音はかすかに積雲層を見る　斗風
彈丸の音身近に聞えニュウス見る　紀川
靴音に追ひかけられてゆく夜道　吐空
キッカケの鍵拍子木についてゆき　三司
爆音の演習である有難さ　榮坊
音入りで畫いてゐる子の爆撃機　緑葉
笠置吟行（十一月二十二日）
煙突へ身をまかしてるペンキ塗り　治男
煙突に火の子が見える町工場　吐空
火葬場の煙突によきんと立つてゐる　緑葉
煙突を見あげて雲に驚きぬ　鮎美
行在所紅葉の山に抱かれて　緑葉
夕煙りおみやげを買ふ手が寒し　鮎美

川雑

今治支部句會（今治）

十一月二十七日　於　文庫居　文庫報

債券を當たらぬものときめて買ひ　心府
債券が當たれば献金する積り　同
債券と決めて外出取り止める　良矩
煉炭も消えて首筋寒くなり　文庫
煉炭の火も消してから鍵をかけ　同
煉炭の火につつましき兵の家　心府
煉炭に少し焦げたる干魚　驢人
吉日を繰上げられた忙しさ　鬼水

川雑

廣島支部句會（廣島）

十一月二十六日　於　伯楽居　久米雄報

肩で暖簾を切つたは親分だらう　朴二

ぢれつたい程親分の氣が坐り　幽香里
親分も女房まかせの十二月　伯峯
水筒の酒海も晴れ山も晴れ　露斗
親分に拾はれて來る馬の骨　俗善薩
親分の無口へ馴れた肩をもみ　土農夫
親分へ隣組長まかり出る　久米雄

川雜　**下關支部句會**（下關）

市多樓報

節米へ一億民は手をつなぎ　喜樂
節米の文字も出て來る子の日記　井蛙
座布團の人形も居て仲のよさ　鯛好坊
節米に芋は大きく湯氣を立て　曉露
炊くたびに一握りづゝ母はのけ　凡平
人知れず母の苦勞は子等の米　草路
節米になれてますよと日本人　潮流
節米をしてから胃腸强くなり　薫風
節米もない神棚の灯があかい　牛休
節米の膳へキッチリ子は坐り　市多樓
座布團の無い常會の貴劍さ　牛休
座布團の數で人員數へられ　關京
新世帶座布團二つ有るばかり　綴る
いゝ月をほめて座布團からはなれ　市多樓
希望ありどんな苦勞も愉快なり　穗波
御希望はありませんかと會は濟み　海朗
子にかけた希望で生きる未亡人　光輝
希望まだ半ば一番鶏と起き　九呂平
子澤山襲つた希望が皆うれし　海朗
拓士今希望の地平線を見る　不川
勇氣出せ母校の名譽リーグ戰　三岳
論功に潜む武勇は言はぬなり　綴る
先生に勵まされてゴールイン　默笑
勇冠の勇氣買はれた椅子が待ち　九呂平
子と生きる勇氣襲服へかくしてる　同

川雜　**尼崎支部句會**（尼崎）

十一月二十二日　於　昭和莊　美知夫報

インチキにかかつて歸る勘定日　八櫻
インチキがばれそうに笑ひ合ひ　加久榮
お菓子より一錢喜ぶ長屋の子　正路
運動會僕と辨當と母さんと　害與史
運動會轉んだせいにして貢ける　同
河原今日運動會の賑やかさ　同
正直を上級生にからまれて　同
現金取引その月給がふと淋し　同
運動會走る吾が子へ母疲かれ　綠翠
盜難に正直者も呼び出され　同
インチキも女と知つて强く出る　同
顏見知り現金出せとせがまれる　弘子
運動會しばし立見をしてしまひ　千代男
正直に云へば刑事の目が光り　同
ランニング父兄席でも手をたたき　葭乃
交渉に邪魔な正直者を連れ　同
現金で顧ひますとはきついこと　同

川雜　**四ツ橋支部句會**（大阪）

白翠氏に慰問煙草を送る

十一月十一日　翠

日曜日今日はお天氣母は留守　秀甫
日曜日隣の留守を頼まれる　かほる
煙草屋の亭主無言で釣を出し　夢想
演習に水槽急に巾を利き　翠溪
演習が濟み水槽に蜘蛛がゐる　山人
水槽のお役に立つた古土管　いづみ
水槽にどぜうが生きる二三日　青雲
辨當をひろげ學生鹿を追ひ　香山
學生といふも今年の冬限り　素人
學生の一人が立てば皆が起ち　翠芳
學生に問へばこの湯知らぬ也　綠雨
內職は立つ間もおしく子を叱り　朗舟
內職へラヂオさよならさやうなら　豆秋
水槽もビルに似合つたのが掘り　防風
水槽をトーチカにする豆勇士　同
煙草屋に資源愛護の箱が立ち　同
煙草屋へ給仕の顏が利いてゐる　美奈子
曹講する家水槽が邪魔になり　同

川雜　**布哇支部句會**（ホノルル）

創立十周年記念　於　出雲大社

十月十三日　北海報

開くには惜しい便りが一つあり　晩翠
言ひ開く智慧も度胸も出來て戀　岬
聖の扉拓いて見たが開かれず　伯樂
醉眼へ開き直つた妻の顏　同
開運の夢から覺めたシガレット　北海
故郷へ錦を飾る開演日　同
明日開く花たのしみに水をやり　友郎
星月夜窓を開いたまゝねむり　同
買溜のマダムに店がまだ開かず　一浪
あつさりと別れて開ける重いドア　草一郎
子の便り開いて噂一しきり　快夢起
開運のしるし御藏は大吉だ　同
開運のお札に母の希ひごと　木公
閉出しの息子に裏の戸が開く　同
血の色で野草が咲いた開墾地　魔花鹿
江戸辯で開き直つた御挨拶　同
御手植の花を見てゐる父の顏　文朗
開店に運あり內助の功もあり　羽山
裏返しの封筒開き敎へられ　同
聞き馴れた聲へ安堵の戸を開き　柳村
切れ話開き直つてさてと云ひ　沙兆
關の鉢一華開いて部屋光る　呂山
十年目咲き綻びし趣味の庭　九洲男
金捨てる事を覺えて世が解り　草一郎
足ることを知つて凍結苦にならず　一浪
住む國に捧げ〳〵て日本人　同
素人にさす氣なる氣も儘ならず　同
世話甲斐があつた今宵の酒の味　魔花鹿
土地買つて無理矢理腰を據ゑ見る　無有
盆栽に觸れたあとあり子を叱る　柳村
安心立命此の時局難割り切れず　同
事勢に友の元氣を判して見　伯樂
OKへ少し不安な指を繰り　俚笛
ヨチ〳〵と二三歩母は手を擴げ　同
冷靜に戀慕の晴るゝ時を待ち　岬
秋風も嬉しく泌みる草莚　文朗
目栗のやうに醬油大事がり　友郎
初戀へさすがに母は氣をくばり　同
ヂョイライドすでに許したら…仲　北海
日に一仙貯めた手柄の慈善寄附　快夢起
シャボン玉一つ〳〵を追ふ子の眼　同
凍結令持たぬ者にはピンと來す　呂山
開運の籤引き當てた失業者　友郎
藏番のひとりたのしむ月に酒　草一郎
藏なんぞ建てゝ時局を儲けてる　木公
郷里に藏建てゝ布哇の土となる　一浪
空手から築きあげたるいろは藏

腹臓なき意見が寄つてまとまらず
十弗で消ゆる惱みも儘ならず　友郎
十仙のことに目に角立てる伯父　一浪
十年は夢なり櫻に遠ざかり　驚花鼈
此の年で戀の十字に行き惱む　羽山
臥新嘗齋十年の汗家をなし　沙兆
伯樂

雜川　**小郡支部句會**（小郡）

十二月二十六日　於　小郡鐵道倶樂部

井蛙報

一仕事終えて昼する入換機　樂天
人馬自動車ビタリと停り貨車の列　游記
連結手馴れて入換音がない　牛休
入換の開始電話で話し合ひ　市多樓
軍臨の入換操車冴えて見ゆ　曉霧
入換は神にすがつてみんな無事　同
入換機見事あやつる赤と青　喜樂
職域へ日曜もなし入換機　鯛好坊
入換の旗のさばきに腕が知れ　城東
レッテルの防諜標語讀んで食ひ　凡骨
母つめた辨當温くし霜の朝　はじめ
ハイキング子は辨當を持つ役目　城東
どの影も辨當喰つてる夜業の灯　市多樓
驛辨に顔を突込む急停車　井蛙
自作農辨當にだけ麥を入れ　城東
あの月を見るにつけても不孝の子　井蛙
叱られる身が羨やましい父なし子　光輝
煮肴の頭と尻は親が喰ひ　城東
更生の意氣母だけが知つてくれ　光輝
母親にだけは希望も言つて置き　鯛好坊
親馬鹿の氣持がわかる歳になり　凡骨
親の罰ですよと母はまた涙　井蛙
親の手に安心をして溝を越え　九呂平
親展書バサット冬の近い音　市多樓
陽は赤い明日は天氣だ鎌を利げ　曉霧
默々と動く牛車へ日は沈み　游記

鳩の胃も丸く眼れて夕陽入り　市多樓
增產に娘も馬の口を取り　恒生
夕月が厩舍の中を明るくし　多吾作
山積の荷物へ馬の息白し　市多樓
母馬について仔馬も田をゆきき　同
俺もまた明日は征くぞと馬をなで　井蛙
もの言はぬ馬の手柄に殊勳甲　喜樂
ぬかるみを征く水筒を馬と頒け　九呂平
わかれの辭助役紋切型で讀み　井蛙
巢立つ今日老校長の顔え盛　同
子の首途くつと耐える母ののど　同
戰ひも辭せず一億肚を決め　寧男
坐右の銘俺に決心つけてくれ　牛休
決心を四角に座つて見せてゐる　昭宏

雜川　**早鐘句會**（大牟田）

十一月二十四日　於　早鐘講堂

蝶人報

今出した夜店御釣りがありません　初舟
㊙と知つて夜店ひやかす氣　路村
偶然に知つた夜店の代用食　末男
値切るだけ値切つて夜店で買はされる　一可
夜店さへ隣の景氣氣にかゝり　一葉
デパートを背に夜店の小さ過ぎ　美弘
トランクの中に夜店のたゝまれる　編水

十月二十三日　於　染料横須クラブ

卒業のみんな博士になる希望　十四之
手相見に捨てた希望を勵まされ　干子
希望だけ大きくもつて渡滿する　銀城
來るべき希望へ間借廣く住み　三昧
辨當へ泌々濟まぬ遲刻する　早鐘
驛辨の白さへ縣の名を尋ね　子盛
サイレンを合圖に辨當箱の音　大腹
饅頭も國策線に添うた味　初舟
國債を買つて共榮圏守る　天風
子寶を悔いた昔を笑ひ合ひ　久之

外敵に見せたいモンペ足袋はだし　進
外敵をハッキリ議會指摘する　初舟
日本の鬚氣へ英米落ちつかず　一葉
神風の仇なす敵を吹き散らし　國雄
外敵へそなへて俺は子澤山　抱逸
外敵へ今更日本語はず　同

雜川　**奉天支部句會**（奉天）

十一月二十五日　水車報

招牌の無字に教はるおもしろさ　路城
招牌へ大陸だなと肯かれ　弘坊
招牌の入齒へ喰はれそうに往く　蘇面
スパイふと自分の影に怖えたり　水車
間諜は金へ命を安く賣り　痴牛郎
交渉に來てセパートに吠えつかれ　水車
咄辯が交渉によいお人柄　洋之助
馬車に先づ乘つてから交渉し　凡兒
まとまつた交渉輕く吸ひつける　白隆
交渉に馴れて笑らつてゐる電話　路城
淋しくも交渉に來て手がふるへ　春子
交渉は有利埠頭の旗へ着く　白隆
國運を賭す交渉のひげをそり　蘇面
慰問隊歸へりの道をいたはられ　白隆
トラックの上から唄ふ慰問團　光陽
慰問團女の交る賑かさ　呑湖
慰問團殘して行つた流行語　戰車
目さむれば慰問の花の匂ふなり　春子
開業も近く招牌屋をせかせ　光陽
招牌のでかさも面子の中へ入れ　紫童
看板屋見ればきよとんとした男　戰車
招牌の金色まぶし當一字　善二
招牌へ鎭をつけるせち辛らさ　蘇面
圓滑を期せと配給採めてゐる　同
配給日通行止の露路になり　痴牛郎
配給の成程初日らしい列　呑湖
配給は賣り切れですと水を打ち　戰車

配給へ組長さんも鍋をさげ　光陽
防諜へ子に諭される立ち話　蘇面
防諜へ見送りもなくひそと兵　洋之助
あんなのがスパイだつたか女秘書　水車
防諜上などと器用に逃げられる　呑湖
友情を見せてスパイは爪を研ぎ　痴牛郎

阪大川柳會（大阪）

十一月廿五日　利生報

役得を口すべらせておこられ　春巢
拔荷をば役得のやうに心得て　山彦
役得のある榮轉をうらやまれ　たけを
役得の方も稅務署見逃さず　春巢
役得がつい一杯を敎へたり　利生
役得の藥あんまり効きもせず　方正
お芝居の臨監かはり〳〵來る　利生
役得のやうに婦人科ひやかされ
出張のついで熱河に途中下車　同
役得も勘定に入れて職につき　同
役得の愚痴は切手のことを言ひ　柳秀
役得の顔で幹事は飲み直し　同
役得かなとゝ先生猪口を受け　同
役得がおまへんのかと仲居酌き　同
懷中の痛まぬ金で害附をする　一彌
役得に昨日も今日も御宴會　筑川
役得は吉良上野をふと思ひ　榮
病院の役得病氣にならねばなら子　同
役得が妻から妻へ洩れて行き　同
役得で似合しからぬ軸をかけ　楠水
役得と知らず女房派手に着る　正甫
役得があるかだん〳〵肥え始め　春巢
役得で建てた家とは誰か知ろ　たけを
特に位記追賜せられて菊薫る　山彦
今ごろは蓮の夢でオイ一二三　利生
ごた〳〵へ君居まさばやと惜しまれる　同
たれからとも故人のくせを言ひつゝ　山彦

カルテには退院とある悲しい日　春巣
葬式のお世話もまめであつた君　利生
悲しさはまだ三七の燈をともし　正甫
燒香の列外二號はすゝり泣き　一彌
阪大の官舍で消へた流れ星　柳秀
朝々のラヂオに消えた庶務課長　同
配給の炭に會長手を汚し　利生
越境の大根自慢にお裾分け　同
配給は何んであらうと金が無し　利生
配給所ロハで還るやうに口を利き　柳秀
實績がなくて上戸の客に詫び　青一路
未亡人酒の配給遠慮され　利生
配給の酒はおロを濕ぐだけ　筑川
魚なしデーお膳の嵩を考へる　方正
配給を飲んで鬱りに繩のれん　青一路
酒着いて父ほんとうの顔となり　利正
末の子に配給の日を敎へられ　青一路
圓滑にせよと配給叱られる　同
配給のお芋が着いたにぎやかさ　方正
金の要る配給夫婦持て餘し　青一路
ぎり〳〵の切符市場でおされて居　柳秀
配給の米さへあれば春も來ん　路郎
配給に土も目方のうちに入れ　同
配給はたまから足らぬ嵩で來る　同
配給に幽靈だとは知りながら　同

松坂倶樂部川柳會（大阪）

十二月七日　白面人報

子が居らず奬學資金世に贈り　雅美
月謝滯納まだ走つてる苦學生　同
押賣も配達もして苦學する　恒明
學資來るまでと小母さん貸してくれ　同
學資來る日だけは親を思つて居　石鹿
血のにじむ學資と母の手紙來る　同
卒業を控へ國許破産する　白面人
學資いま半ば玉突屋に運び　同
書留を下宿笑つて持つて來る　同
叔父が來て卒業までの金を出し　同
醫者にする學資でなつた劇作家　同
學資調査こんなに使ふ人もある　孤蓬
番頭が學資をもつて訪れる　同
掛算をすれば學資のあなどれず　同
借金をした學資とは知らせない　同
軸もつて五女の學資を作りに出　同
檜山學資々々と立つてゐる　同
先輩が出した學資が重荷なり　美根子
出世して昔の學資けむたがり　同
學資ぐらゐはなどと女にはげまされ　生々庵
學資補助娘を奥れる下心　同
パンフレット寫眞切抜き後は捨て　曹天
パンフレット解つたやうな顔になり　雅美
パンフレットルーズヴエルトを叱りつけ　恒明
週報の通り署長は訓示する　同
パンフレット生みの親なる社會主義　石鹿
パンフレット思へるくインテリは移氣なり　同
パンフレット色の綺麗な方を取り　白面人
パンフレット當てのある身は讀み返し　同
パンフレット結局貯金しろと云ふ　孤蓬
パンフレットの間はどうなる貰れたのに　同
パンフレット師走の風にふるへる　美根子
パンフレット〳〵閉場の床の上　同
パンフレットの樣は藥効きめなく　生々庵
パンフレット上手にうそを書きまとめ　同
土地宣傳賣はねば馬鹿の樣に書き　同
終ひ迄讀めば藥の廣告さ　曹天
豚の靴弱いものだと書いてなし　同
分讀地繪で見る程の土地でなし　同
恩賞に信託案内讀んで見る　同
便乘の國策文書が鼻につき　同
組長にされて無學を後悔し　生々庵
內地米無學の兄が一人喰ひ　雅美
義理堅い男無學であつたとか　同
大學は出たが無學に使はれる　恒明
利害ある時に無學の强い腰　同
無學ですけれど〳〵とこれられる　同
文盲の恐ろしいまでの物憶え　石鹿
今時の奴は奴はと無學也　同
無學今日紺綬褒章拜受して　同
國の爲と言へば無學の素直なり　同
念押して押して無學は判をつき　白面人
種は斯う播くと無學に敎へられ　同
農學士の話百姓腑に落ちず　同
ペンインキ無學なんだか親しめず　同
人生五十無學をかくす地位が出來　孤蓬
習慣と勘とコツとに生きてゐる　同
學問の價値を淋しく笑ふのみ　同
語意少しわからぬまゝで使ひ馴れ　同
インチキをしても無學な字となる　同
無學だときけど社長の腕は冴え　美根子
あの社長丁稚上りといふ噂　同
無學我れ家に殉じた誇あり　生々庵
無學でも義理は心得居り候　同
無學でも儲ける道は別の事　同
私なんかェへと無學顎を撫で　同
無學故銅御殿見棄てられ　同
無學でも浪花節から義理を說き　曹天
老課長ローマ字位讀めるらし　同
無學だと云ふ相場師の太ッ腹　同
棒だけで判る無學の覺え帳　同
無學ならこそ一軒家にも安住し　同
准尉今學歷と云ふ惱みが出　同

有恒 松坂 合同川柳會（四回）

十一月二十三日　於　松坂倶樂部　白面人報

我儘と知りつゝあてのある女中　雅美
老ひ先は短し親だ我儘言はせとけ　曹天
我儘な娘で通る新世帶　青美
我子なら一つ!!と思ふ駄々をこね　波夢造

錬成の冬
摩耶六甲へ
君と僕
神戸から大阪へ
大阪から神戸へ
待たずに乘れる
阪神電車

我儘を 相手に よつて 使ひ 分け　平三
我儘の 今日も 見せない 定期券　白面人
我儘の 通ればそれも 氣に 入らず　同
我儘は 麥や 外米より わけける　波夢造
我儘に 育つて 廳召馬を 曳き　曽天
我儘も 他人の 飯に 蝿けられ　雅美
我儘な夫 に 妻の 智慧 がいり　美根子
大阪のこんなところが起きてゐる　白面人
大阪にまだ 未練 あり 轉業者　曽天
大阪は 又 憂りかと 航空士　波夢造
大臣が 來て 大阪の 顔が 立ち　平三
かたくな心で 大阪 引あげる　孤蓬
バイブルを 抱へて 通る 藍屋敷　同
大阪の 埃のにほふ 賣塚　青美
陳情を 大阪 辯でまくし 立て　同
溫泉場 大阪辯で 酔うてゐる　石鹿
大阪で 胸の 病を 貰つて 來　同
大阪へ 夜逃げしたのが 寄附がしら　同
心齋橋あゝ 生きてゐる 動いてる　雅美
鱧の 皮 大阪 といふ味 がする　美根子
警笛 もまして 一心寺の 法會　波夢造
大阪に 馴れ 法善寺 はすに 抜け　銳々
アルコール明日はからりと忘れる　アート
終電車アルコール氣は 隅へ 立ち　青美
文化史のもう 觸れてゐるアルコール　孤蓬
ノービール 妻は 安心して 飲ませ　雅美
リユウクサック アルコールランプも入れて行き　同
味氣ない 世だとアル中思へども　白面人
アルコールランプで教授茶を沸し　同
葱瘡のアルコール 一寸嗅いでみる　波夢造
アルコール 昔燃やした 事もあり　同
メチールを 飲んだ心も 合點され　同
小切手へアル中の手がふるえて居　石鹿
アルコールなしで 騒げるたちでと　同
アルコール 抜きだと 幹事詫びてゐる　波夢造
アルコールで拭いて 看護婦 箸をとり　曽天
神經 衰弱 文明病 といふ 奴さ　美根子
どうらくなくせにこまかく氣をかる　孤蓬
神經が 通つてるかと 罵られ　銳々
神經 に さわらぬやうに 襖あけ　青美
無神經野人と云はれいゝ氣なり　石鹿
神經 にして はあの 音大きすぎ　同
襄腐 もせず 神經は 無いらしい　波夢造
燒手 にならふ 紳士 の氣の 强さ　同
蛸 やはり 神經があり 色を 變え　同
神經にさわることのみいふ 奴だ　銳々
これですと 齒科醫神經出して來る　波夢造
神經で すよと 醫者取り あはず　石鹿
奥さんの 持病は 醫者も 心得て　アート
喘息の 名藥 をきく 仕 舞 風呂　孤蓬
持病もう 慣れた手附で 注射うち　白面人
ヒステリー持病だと云ふ又ヒスリ　生々庵
飲む程に 酔ふ程に 持病忘れ 果て　銳々
トランクへ母は持藥を入れてくれ　石鹿
宿痾十年詩人としての名を得たり　同
人不足 持病は 甘い 點で 採り　青美
持病ありと言へ課長の 猪口を受け　同
產業報國 糖尿ナンカ氣にかけず　曽天
又ヒステリーかと亭主取り合はず　銳々
仲人は持病のことは云はなんだ　美根子
呑みたいが持病でしてとまけて　路郎
特權のやうに 持病をたてにとり　同
より釣らず針と沙蟲の所爲にする　雅美
魚釣 の話 大方舌で つり　アート
デパートで 揃へて釣の 本を 買ひ　白面人
魚籠のぞき釣れますかと 網の 立つ　石鹿
よく聞けば 釣つて逃がした話也　曽天
どう仕掛けあるのかお隣の釣れ　生々庵
主人魚釣 女房が 隣組長　平三
河豚一つかゝりそれから釣れぬ也　銳々
釣電車他人の魚 生ぐさし　至藝壇
借金も 子供も 忘れ 糸を 垂れ　同
餌サ、々、々、取られて居ても魚釣だ　五遊
昨日なら百も釣れたと船頭云ひ　同
闘病術の 中に 魚釣 一科目　美根子
大公望 案山子の 樣ななりで來る　同
諦めた 場所に 他人の 釣れる事　同
釣れぬこと 竿に 蜻蛉が 止りに來　波夢造
辛抱はもう 二時間の 浮子を 見る　同
同病 相憐 れみぬ 釣れぬ 同志　同
風邪をひくなどと 魚釣 考へず　白面人
竿あげて 歸れば 元の 憂き 世なり　青美
見晴しへ釣れいでもよい 糸を 垂れ　アート
命がけの 夜釣 哀れな 魚籠を 提げ　路郎
國を 擔ふ 人とも 見えず 糸を 垂れ　同

警察病院川柳會（大阪）

大川五郎氏全快句會

十一月十八日　於　有恒倶樂部

二歩三歩 はなれて 歩く 仲であり　正柳報
はじからぬ 袈水着の 寢そべつて　湧三
乘合自動車の中親の氣兼ねを子は知らず　文龍
奥さんは 中味も 知らず氣兼をし　同
戰況ニュースまたもシーン妻と觀る　正柳
氣兼して 一箸つけただけで 去に　同
氣兼ねする 程に下役 奴せて 居す　吉郎
無禮講とは云ふものゝ氣兼ねして　久郎
氣兼ねして 飲んだ 費用は 頭割　同
氣兼ねして 人生五十過ぎにけり　道朗
其の心臟でも氣兼ねを二の句出す　雨聲
課長でも氣兼ねはせぬぞ王手飛車　柳峯
氣兼ねする時ではないと蘇峰立ち　同
食べて來たよと辯當箱の音をさせ　正朗
効能を氣兼ねもせずに並べ立て　貞子
お中日氣兼なく雜誌讀み　正子
竹の 皮氣 兼をしない 指が 來る　杏華
氣兼ねして掛ける電話は又とぎれ　青柳
テレフンケン氣兼ねる程の聲を出し　浩
胃癌たときつばり云へて醫者若く　湧三

時局吟（二句）

やどかりの殼を出る日はいつのこと　同
熟柿 もう 觀賞用 でありませぬ　同
ABCD屁つぴり腰で通せんぼ　吉郎
カステラへ四十面して並ばされ　同
觀音講ソプラノもありバスもあり　正柳
㊙の膏藥だらけ醫者に診せ　同
一列も心齋橋のてれくささ　貞子
松の内 五尺六寸もて餘し　浩
松の 間は 大臣樣のお 越しです　同
松竹梅 いけて 晦日を 終ひ にし　正朗

五郎氏全快さる（一句）

暮れ からの 松竹梅 を陽の 下へ　湧三
水族館の 鯛憚らぬ 顔を 向け　正柳
誕生 日鯛 は大きく 膳を 占め　一平
目出度 と云はれる 程の鯛でなく　久郎
茅浮 鯛と 田舍の 人に 見破られ　柳峯
どの鯛も兄貴が持てば生きて居り　素舟
鯛の目へ猫ちんゝと注ぐなり　正朗
公報が 來る間に 鯛を 擔がれる　雨聲
鯛網に 闘りをひと日延期する　同
鯛茶漬たべて祇園の 灯にはいり　湧三
みはからひ鯛の目玉もあつてよし　同
玄關へ 鯛が 居いた 賬やかさ　路郎
退院へ 闇です といふ 鯛を 吳れ　同

麻生路郎著

新川柳評釋

＝苦笑と哄笑で人生勉强＝

★定價 八十錢（送料）六錢
・海外註文は送料實費加算を乞ふ

★どのページから讀んでもよい。面白いから引づられて讀む。讀み了つたら、川柳の味が判るといふ本である。

不朽洞

安産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

楢林醫學博士　推奬
片瀨醫學博士　監査

片瀨醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

大阪道修町　和田卯助商店

ガラス壜代用
紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
二葉屋商店
電話事務所用　天下茶屋（五八〇二番　五八〇〇三番）
工場用　同　（五八〇〇四番）

戰勝祈願

大阪護國神社
住吉神社
大鳥神社
山東三社巡拜
熊野三山巡拜

南海電車

★★ 社關係の人々 ★★

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本夘之助　顯原退藏　淺田一　末弘巖太郎

客員

鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　亀井晟修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員

橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤鋒　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉普天　小畑自有涙　古川風竹　前山北海　古川蘭花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　黒川紫香　丸尾潮花　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　酒井斗風　北川春巣　植山九天　小林橙舍　夷一笑　鈴木石鹿　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾桑　多田一波　櫻川不水　田中風葉　中原銃人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　岩本雀踊子　清水友帆　石野秀雄　清水史路　清水白柳子　西川愁水　德永雅美　河野夜王　津路紅多呂　濵玲之介　野口柳太　小川恒明　飯尾寄與史　酒井美知夫　小林文月　谷川綠風　阿萬萬的　岩崎勇記　岩崎水虹　道廣世紀彦　國弘半休　篠山籌彦　高田抱逸　月原宵明　矢野赫堂　鈴木九坡　逸見灯竿　石原伯峯　植山九天笑　小林橙舍　夷一笑　鈴木石鹿　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾桑　多田一波　櫻川不水　田中風葉　中原銃人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　岩本雀踊子　清水友帆　石野秀雄　清水史路　清水白柳子　西川愁水　德永雅美　河野夜王　津路紅多呂　濵玲之介　野口柳太　小川恒明　飯尾寄與史　酒井美知夫　小林文月　谷川綠風　阿萬萬的　岩崎勇記　岩崎水虹　道廣世紀彦　國弘半休　篠山籌彦　高田抱逸　月原宵明　矢野赫堂　鈴木九坡　逸見灯竿　石原伯峯　植山九天笑

輝しい戰捷の春のお姿を

工藤清寫眞館

大阪市西區土佐堀船町
電話土佐堀五五五〇番

待望の句集出づ！

石曾根民郎
川柳句集

題字 麻生路郎
序文 麻生路郎
装幀 小林朝治
版画 関根準一郎

川柳句集「大空」の著者は信州の産。純情の持主。彼の句には彼獨自の個性が盛り上つて異色ある川柳を構成してゐる。彼の句は漫畫に出來ない句が多い。所謂川柳らしい川柳の境地から拔け切らぬ惱みを持つ川柳人の一讀を薦めたい。

B6版・和紙本版裝函入 定價一圓（送料拾錢）

堺市出島海岸通二丁目一八二
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二番

愛飲家に確認さる

アサヒビール

大日本麦酒株式會社

含有滋味がもたらす元氣

敬神崇祖

伊勢大神宮、熱田神宮、橿原神宮、神武天皇御陵をはじめ奉り數多くの御陵墓、枚岡神社、奈良春日神社、石上神宮、大和神社、大神神社、吉野神宮、丹生川上神社（上・中・下社）、談山神社等の官幣社ほか御由緒深き神社への光榮ある參拜路であります

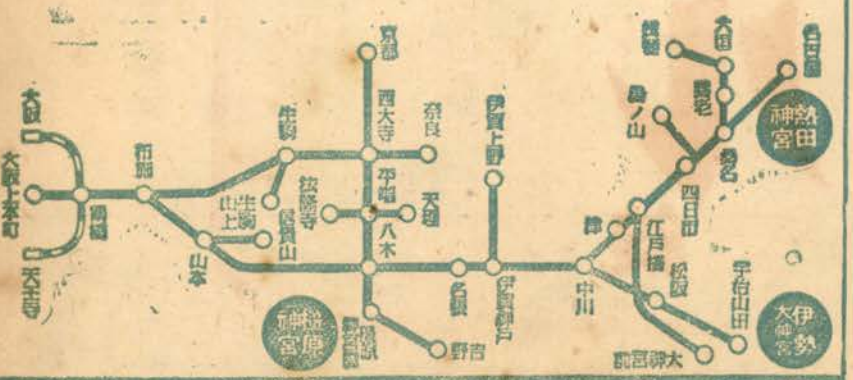
心身錬成

神武天皇大和御平定の聖蹟をはじめ、飛鳥奈良朝時代の文化を物語る遺蹟下りては吉野朝後醍醐の史蹟、奈良、吉野、多武峯、室生寺、赤目四十八瀧、香落渓、寶塔等の名勝に一般向遊樂道場としてのハイキングコースがあります

信貴生駒縱走、枚岡公園—生駒山上—攝河泉展望コース、平城史蹟めぐり、飛鳥史蹟めぐり、多武峯より石舞台・岡寺へ、三輪より石上神宮・天理へ、赤目四十八瀧より香落渓へ、その他奈良、吉野、生駒山脈を中心として數多くの優秀コースがあります

重要交通路

大軌と參急電鐵とが合併して參營業距離は四三八粁、これに直營バス及傍系の電車バスを加える時は一千粁を超え、大阪奈良三重愛知岐阜の一府四縣に跨り交通産業に緊密な關係を有する重要な任務を擔うてゐます



關西急行鐵道

（旧名大軌參急電鐵）

SENRYU ZASSHI No・216
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十二年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年十二月廿五日印刷納本・昭和十七年一月一日發行

感冒の予防と治療に

THERAPO 20 TABLETS

テラポール錠

感冒
扁桃腺炎
中耳炎
蓄膿症

各種の化膿菌、流行性感冒菌、淋菌等生体内に潜入して病源となる惡性細菌を確實に撲滅し、化膿性皮膚疾患、扁桃腺炎、感冒、中耳炎、蓄膿症、齒槽膿漏、齒齦炎、丹毒、敗血症、膀胱炎、急性慢性の淋疾等を最も短期間に治療せしむる新發見の化學療法――本邦ズルフオンアミド劑の始祖たる榮譽と卓越せる技術による最高の純度とを以て全國醫學界に信認せらるゝ第一製藥のテラポール！

六錠・二〇錠・一〇〇錠

元造製
第一製藥株式會社
東京日本橋區江戸橋
大阪東區道修町

川柳雜誌 第二一六號 ㊞定價金三〇錢 送料壹錢